

桜井畑遺跡

(川田・和戸サッカー場地点)

—サッカー場建設に伴う発掘調査報告書—

2023

学校法人 C2C Global Education Japan

甲府市教育委員会

昭和測量株式会社



方形周溝墓（SZ 1～3）周溝検出状況 西から



方形周溝墓（SZ 1～3）周溝完掘状況 西から



竪穴建物 (S12) 床面検出状況 南から



土坑墓 (SK7) 遺物出土状況 西から

序

甲府盆地のほぼ中央に位置する甲府市は、北側の長野県との県境に聳える標高 2,599 m の金峰山から南側の御坂山塊までの甲府盆地を縦断し、南北約 42km、東西約 12km の細長い市域を形成しています。

調査地点は、甲府盆地の北東部標高約 264 m に位置し、調査地点東方には、日本三大急流の一つ富士川（笛吹川）の支流となる平等川が流れます。この平等川はもともと笛吹川の流路であり、明治 40 年の大水害を契機に本流の流路が変わったことがわかっています。調査区の周辺には古代から人々が居住していたことを裏付ける亀田遺跡、川田久保田遺跡など、古墳時代の集落遺跡や、大坪遺跡、川田瓦窯跡、土土器瓦窯跡など古代に土器や瓦を生産した遺跡が展開しています。

桜井畑遺跡は、弥生時代から平安時代の遺跡として周知され、過去の調査においても古墳時代前期の方形周溝墓や古代の集落跡や村落内寺院が確認されています。

今回の調査においても、古墳時代前期の方形周溝墓が 3 基出土したことから、旧笛吹川の流路の北西にあたる沖積地が古墳時代前期には墓域として選定され、利用されていたことが想定されます。

また古墳時代前期の竪穴住居跡が方形周溝墓と切りあって出土したことから、古墳時代前期ころに墓域から集落へと土地利用が転換され、その後古墳時代後期以降に集落としての土地利用が固定されたものと思われる。

さらに、竪穴住居が基軸とする方位が、古墳時代前期のものとは異なっており、平安時代の竪穴住居跡は現在の町割りの基軸線とほぼ同一となります。現在の町割り、調査区北側にある現在の国道 411 号線と同じ基軸を採用することから、この道路により規定されたことは明白であります。竪穴住居の基軸から、この道路が平安時代には整備され始めたことが想定できることも調査の成果として挙げられます。

今回の調査成果が、甲府の歴史研究のみならず、日本の歴史を解明する資料としてもご活用していただければ幸いです。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、開発事業者及び関係者のご理解、ご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された皆様方のご努力の成果であります。ここに感謝申し上げる次第であります。

令和 5 年 9 月

甲府市教育委員会

教育長 數野保秋

例言

1. 本書は、山梨県甲府市和戸町1-1他に所在する桜井畑遺跡(川田・和戸サッカー場地点)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査はサッカー場建設に伴い、学校法人C2C Global Education Japanの費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、学校法人C2C Global Education Japanと甲府市教育委員会および昭和測量株式会社の間で三者協定を締結し、昭和測量株式会社が調査主体となり、甲府市教育委員会の指導を受けて行った。
[調査体制]
調査担当 泉英樹・望月健太・藤巻浩太郎・浅川晃一(以上、昭和測量株式会社文化財調査課)
調査顧問 新津健(昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問)
発掘従事者 青柳正史・河原広敏・岸敏之・久保寺吉文・佐藤一郎・佐野香織・内藤敏夫・中澤保・広瀬ありさ・古屋房子・渡辺俊夫
整理従事者 石坂恵理・垣内律子・尾川正美・齊藤里美・佐藤香織・竹中加奈子・渡辺麗子
4. 発掘調査は令和4年8月19日から令和4年10月31日まで行った。整理報告書作成業務は令和5年4月17日から令和5年9月30日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は、泉英樹・望月健太・藤巻浩太郎・浅川晃一が撮影した。空中写真撮影は藤巻浩太郎が行った。遺物写真は泉英樹が撮影した。
6. 本書の編集は泉英樹が行った。執筆分担は以下の通りである。
第1章第1節：平塚洋一
第5章第1節：伊藤茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadize・黒沼保子、
第2節：バンダリ スタルシャン
その他の執筆は泉英樹が行った。
7. 本調査における自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに、金属製品の保存処理は公益財団法人山梨文化財研究所に委託した。
8. 発掘調査および報告書作成にあたって次の方々の御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する(順不同・敬称略)。
里古達美・野中大輔・廣島琢磨・佐々木正裕(学校法人C2C Global Education Japan)、
志村憲一・金子裕太郎(甲府市教育委員会)、森田二三夫・清水丈司・小林雅哉・野澤真衣(株式会社早野組)、
北澤宏明・熊谷晋佑(山梨県観光文化振興・文化財課)、高野玄明・正木季洋(山梨県埋蔵文化財センター)、
中山誠二・榎原功一・畑大介・平野修・竹井良(公益財団法人山梨文化財研究所)、坂本美夫、末木健
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会に保管している。

凡例

1. 本書で使用した地図は、第1・2図：甲府市役所発行の都市計画基本図1/2,500、第2図：国土地理院発行の地形図「甲府」1/25,000を原図として、改変加筆して使用した。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構全体図のX・Y座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高(T.P.)を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づいた。
7. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。遺構番号は発掘調査時点で種別ごとに番号を付したが、方形周溝墓の周溝については報告書をまとめる段階で遺構記号と番号を振り替えた。
方形周溝墓：S Z 竪穴建物：S I 土坑：S K ビット：S P 溝状遺構：S D 性格不明遺構：S X
8. 遺物番号は連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
9. 遺構平面図における一点鎖線は視乱、破線はサブトレンチ・試掘坑・推定線である。
10. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。



本文目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と層序	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	9
第4章 調査の成果	10
第1節 方形周溝墓	10
第2節 竪穴建物	11
第3節 土坑・ピット	13
第4節 溝状遺構	15
第5節 不明遺構・試掘調査出土遺物	19
第5章 自然科学分析	54
第1節 桜井畑遺跡(川田・和戸サッカー場地点)出土試料の放射性炭素年代測定	54
第2節 桜井畑遺跡(川田・和戸サッカー場地点)から出土した大型植物遺体	57
第6章 総括	61
第1節 桜井畑遺跡(川田・和戸サッカー場地点)の出土遺物	61
第2節 桜井畑遺跡(川田・和戸サッカー場地点)の遺構変遷と課題	63

挿図目次

第 1 図	試掘トレンチ配置図	3	第 19 図	SD8・SD9・SX5	36
第 2 図	遺跡の位置・周辺の遺跡分布図	6	第 20 図	SD10・SD11・SP36・SP37	37
第 3 図	遺構全体図	20	第 21 図	SD12・SK14・SK19・SK20・SP12-17	38
第 4 図	SZ1-3・SD4b・SD7(1)	21	第 22 図	SD13・SP21・SP27-30・SP33・SP38・SX7	39
第 5 図	SZ1-3・SD4b・SD7(2)	22	第 23 図	SD14	40
第 6 図	SZ1-3・SD4b・SD7(3)	23	第 24 図	SD19・SD20・SK18	41
第 7 図	SZ1-3・SD4b・SD7(4)	24	第 25 図	SD15-18・SX4・SX6	42
第 8 図	SI1	25	第 26 図	SZ1 出土遺物	43
第 9 図	SI2	26	第 27 図	SZ2・3 出土遺物	44
第 10 図	SI3(1)	27	第 28 図	SZ3・SI1 出土遺物	45
第 11 図	SI3(2)	28	第 29 図	SI2・SI3 出土遺物	46
第 12 図	SI4(1)	29	第 30 図	SI4-6 出土遺物	47
第 13 図	SI4(2)	30	第 31 図	SK1・SK7・SP21 出土遺物	48
第 14 図	SI5(1)	31	第 32 図	SD4b・SD7・SD11・SD14・SD20・ SX4・SX6・SX7 出土遺物	49
第 15 図	SI5(2)・SI6	32	第 33 図	試掘調査出土遺物 (T1・T2・T4・T6)	50
第 16 図	SK1-4・SK6・SP1-3・SP34・SP35・SP39	33	第 34 図	出土遺物の様相	62
第 17 図	SK5・SK7・SX2	34			
第 18 図	SD1	35			

表目次

第 1 表	周辺の遺跡	7	第 4 表	遺物観察表 (土器・土製品)	51
第 2 表	土坑一覧表	15	第 5 表	遺物観察表 (石器・石製品)	53
第 3 表	ピット一覧表	15	第 6 表	遺物観察表 (金属製品)	53

写真図版目次

巻頭図版 1	方形周溝墓 (SZ1-3) 周溝検出状況 方形周溝墓 (SZ1-3) 周溝完掘状況	図版 10	SI5
巻頭図版 2	竪穴建物 (SI2) 床面検出状況 土坑墓 (SK7) 遺物出土状況	図版 11	SI6・SK1・SK5・SK7
図版 1	調査区南東部・調査区中央部	図版 12	SK11・SK14・SK16・SP21・SP36・SD1・SD9
図版 2	調査区中央部・北西部 調査区北西部	図版 13	SD14
図版 3	SZ1	図版 14	SD19・SD20・SX4・SX6
図版 4	SZ2・SD4b	図版 15	SZ1 出土遺物
図版 5	SZ3	図版 16	SZ2・3 出土遺物
図版 6	SI1・2	図版 17	SZ3・SI1 出土遺物
図版 7	SI2	図版 18	SI2-4 出土遺物
図版 8	SI3	図版 19	SI5・SI6・SK1・SK7・SP21 出土遺物
図版 9	SI4	図版 20	SD4b・SD7・SD11・SD14・SD20 出土遺物 SX4・SX6・SX7 出土遺物
		図版 21	試掘トレンチ (T1・T2・T4・T6) 出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯（第1図）

令和3年12月、サッカー場造成という開発工事に先立ち、学校法人C2C Global Education Japan（以下「学校法人C2C」とする）と甲府市の間において、いくつか事前協議が行われ、その一つとして埋蔵文化財包蔵地の隣接地における大規模開発として、事前に試掘確認調査を実施することを決定した。

令和4年3月2日、埋蔵文化財の試掘確認調査に着手した。幅2mの調査トレンチを南北方向に4条、東西方向に2条設定し、総調査面積1,180㎡にわたって調査を実施した。その結果、道路を敷設替える地点を中心に遺構・遺物が検出された。そのため、工事に先立って埋蔵文化財に影響が及ぶ地点を本発掘調査の対象とすることを協議の上、決定した。

令和4年3月28日付けで、学校法人C2C理事長より、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が山梨県知事宛てに提出された。それに対して山梨県知事から、令和4年4月12日付け文化第12号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知があり、その通知に基づき、本発掘調査を実施することとなった。学校法人C2Cにおいて、発掘調査を委託する機関として昭和測量株式会社を選定された。

本発掘調査に関しては、調査機関である昭和測量株式会社から、令和4年7月20日付けで文化財保護法第92条に基づいて埋蔵文化財発掘の届出が山梨県知事宛てに提出され、令和4年7月29日付けで山梨県知事から文化第1664号で埋蔵文化財発掘調査の実施について通知が出された。

事業主体である学校法人C2Cと昭和測量株式会社は令和4年8月10日付けで、発掘調査に関する契約書を締結するとともに、前二者と甲府市教育委員会を含めて、埋蔵文化財に関する協定書を締結し、令和4年8月19日より本発掘調査を開始した。

第2節 発掘作業の経過（第1・3図）

発掘調査は令和4年8月19日から10月31日まで行った。

事業地内では二面のサッカー場建設が計画され、東側のサッカー場の周囲にクランク状に敷設される道路予定地とネットフェンス敷設予定地が調査対象範囲となった。発掘調査は道路予定地の南東部、続いて中央部およびネットフェンス敷設部分、最後に北西部の順に進めることとなった。

調査日誌抄録

令和4年

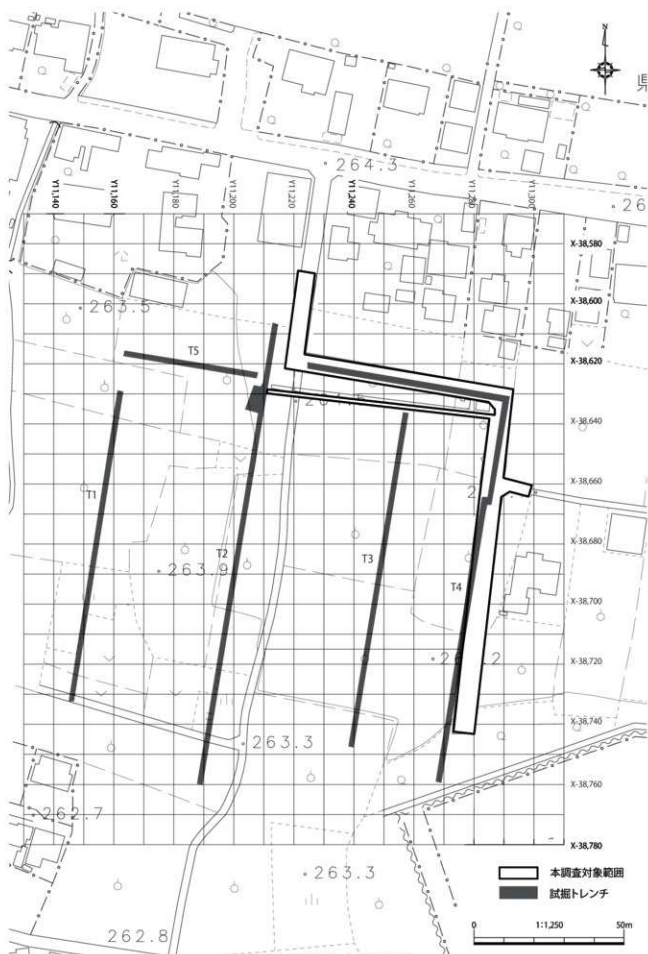
- | | |
|----------|---|
| 8月19日（金） | 調査区設定作業（南東部）。重機・仮設トイレ搬入。調査区の草刈りなど環境整備。 |
| 8月22日（月） | 甲府市教育委員会（以下、市教委）立会の下、重機による表土掘削開始（南東部）。仮設基準点設置。 |
| 8月23日（火） | 遺構検出・壁面成形作業を開始。市教委立会確認。 |
| 9月5日（月） | 空中写真撮影。南東部の遺構検出状況を撮影。2基以上の方形周溝墓の周溝を確認。 |
| 9月6日（火） | 方形周溝墓の周溝のサブトレンチ掘削。市教委立会確認。 |
| 9月12日（月） | 方形周溝墓の周溝掘削。竪穴建物S11掘削。市教委立会確認。 |
| 9月15日（木） | 調査区設定作業（中央部）。周溝土壌サンプル採取。 |
| 9月16日（金） | 空中写真撮影。方形周溝墓（SZ1～3）の周溝完掘状況撮影。 |
| 9月17日（土） | 重機表土掘削（中央部）。※以降、10月3日（月）まで遺構検出・遺構掘削作業と並行しつつ、調査区中央部の重機掘削作業を断続的に行う。 |
| 9月21日（水） | ネットフェンス予定地西端の張り出し部分の遺構検出・土層確認を行う。遺構・遺物は確認できない。下層確認後、市教委確認の上、調査終了。埋戻し。 |

- 南東部も調査終了。市教委最終確認の上、本工事に明渡し。
- 9月22日(木) 遺構検出・壁面成形作業(中央部S I 2付近)。
煙道の長いカマドをもつ竪穴建物(S I 2)検出。
- 9月29日(木) ドローン空中写真撮影。S I 2および周辺の遺構完掘状況を撮影。
S I 2カマド土壌サンプル採取。
- 10月3日(月) 遺構検出・壁面成形作業(中央部S I 3～5付近)。
- 10月4日(火) 竪穴建物S I 3～5およびS K 7遺構掘削。
S K 7の底面では平安時代の土師器の坏が5点出土。下層土壌サンプル採取。
調査区北西部のアスファルト舗装撤去。
- 10月5日(水) 竪穴建物S I 3～5遺構掘削。いずれも平安時代の遺物が出土し、南東カマド。
重機表土掘削(北西部)。
- 10月12日(水) S I 3・S K 7完掘。
重機表土掘削終了(北西部)。市教委立会確認。
- 10月13日(木) ドローン空中写真撮影。中央部S I 5以西の遺構検出状況を撮影。
S I 4カマド土壌サンプル採取。
- 10月14日(金) S I 4床面検出。カマド掘方確認。S D 8・11 遺構掘削。
- 10月15日(土) S I 5床面検出。
ドローン空中写真撮影。S I 3～5・S K 7の完掘状況を撮影。
- 10月17日(月) 北西部遺構検出。大形の溝状遺構S D 14 検出。
- 10月18日(火) S I 5カマド土壌サンプル採取。
- 10月19日(水) S I 5カマド掘方確認。S I 5掘方確認。
- 10月20日(木) S I 4掘方確認。S X 4・6(倒木痕か)完掘。北西部遺構掘削。
- 10月24日(月) ドローン空中写真撮影。中央部・北西部の完掘状況を撮影。
- 10月25日(火) S D 14の下層確認。S D 19・20土層精査・下層確認(道路遺構の側溝の可能性)。
- 10月26日(水) 最終の遺構確認と遺構図の補測。重機搬出。
- 10月27日(木) S D 14の土壌サンプル採取。市教委の最終確認を受けて現場調査終了。
仮設ハウス・トイレ・倉庫を搬出。仮囲い撤去。現場撤収。
- 10月31日(月) 埋蔵物発見届を作成し、成果品をとりまとめて、現場調査業務終了。

第3節 整理等作業の経過

整理・報告書刊行業務は、令和5年4月17日から9月30日の間、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内にて行った。

遺物の水洗作業までは前年度の現場調査業務時に終了しており、整理作業は出土遺物の注記作業から開始し、接合・復元と作業を進めて実測遺物を選別した。遺物実測図の作成は5月12日までに行い、そのデジタルトレース作業を7月5日までに行った。遺物写真は7月7日までに撮影した。その後、7月20日までに遺物の挿図と写真図版、観察表を作成した。記録作業終了後、金属製品については保存処理を公益財団法人山梨文化財研究所に委託した。出土遺物の記録作業と並行して、現場の調査写真や遺構図についても順次整理作業を進めた。現場で作成した遺構図のデジタルトレースは6月20日までに終了し、7月20日までに遺構の挿図と写真図版の作成が終了した。また現場で採取した土壌サンプルの水洗・選別と抽出作業は6月16日までに行い、試料の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。これらの成果と自然科学分析の結果を取りまとめて報告書の編集、原稿執筆を行った。その後、校正作業を経て、9月30日に報告書を刊行した。



第1図 試掘トレンチ配置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

桜井畑遺跡は、甲府盆地の北東部を流れる平等川の右岸に立地し、遺跡の北西側に十郎川、東側に平等川が流れる。平等川は、笛吹川の支流であるが、笛吹川は明治40年の大水害によって流路が大きく変化した。もとは笛吹川の主流が流れていたところが現在の平等川の流路となっている。国土地理院の地形分類によれば、遺跡周辺は広い範囲で氾濫平野となっており、その中に自然堤防の微高地が点在する。桜井畑遺跡の遺跡範囲は東半部は概ね微高地であるが、今回の調査地点は氾濫平野に立地する。遺跡の北側には、大蔵経寺山（標高715m）、北西側には八人山（標高572m）が位置する。大蔵経寺山の麓には、その名の由来である大蔵経寺の他、延喜式内社の物部神社や山梨岡神社など古い歴史を持つ寺社が所在する。また、古墳時代から中世に至るまでの遺跡が密集し、甲府市域でも遺跡の密度が濃厚な地域である。

桜井畑遺跡全体の現況地盤は、標高263.3～266.6mを測る。北東から南西方向に向かって緩やかに下っていく地形である。桜井畑遺跡の南端に位置する今回の調査地点は、標高264.2～264.7mであり、遺跡範囲では、もっとも低い場所に立地する。なお、調査地点から国道411号線（城東通り・旧甲州街道）を挟んだ北側では、桜井畑遺跡B地区、桜井畑遺跡A・C地区として、1998年と1999年に発掘調査が実施されている他、山梨学院川田運動場遺跡群（桜井畑遺跡・亀田遺跡・川田久保田遺跡。以下、「川田運動場遺跡群」）として、1999～2005年に発掘調査が実施されている。

第2節 歴史的環境（第2図・第1表）

縄文時代・弥生時代

調査地点周辺は、縄文時代から弥生時代を主体とする遺跡が少ない地域である。隣接する桜井畑遺跡B地区、A・C地区や川田運動場遺跡群でも、土器は確認されるもののまとまった遺構はみつからない。弥生時代後期になるとやや遺構の分布が増加し、明確な居住の痕跡も確認されている。川田運動場遺跡群で竪穴建物や掘立柱建物、V字状溝が検出されている他、今回の調査地点の北西1.3kmの道々芽木遺跡（248）でも竪穴建物や溝状遺構が検出されている。また、南西2.4kmに位置する塚越遺跡（214）では、2021年度に本調査が行われ、弥生中期と後期の土器が出土した。硬玉製の勾玉や黒曜石の石核・剥片・チップなども出土した他、土壌試料からオオムギの炭化種子を採取している。オオムギと同位置で採取したイネの炭化種子の放射性炭素年代測定では弥生時代中期の結果が出ており、当時の甲府盆地で稲作とともにオオムギ栽培が行われていた可能性が報告されている。

古墳時代

古墳時代以降は遺跡が増加する。桜井畑遺跡A・C地区の調査では、前期初頭の方形周溝墓が3基確認されており、3号墳は一边が33mに及ぶ規模を持つ。古墳は、八人山や大蔵経寺山の山麓部に、天王社古墳（105）、山田古墳（140）、横根村内1号墳（245）・2号墳（246）などが点在する。さらに大蔵経寺山の南西斜面と八人山の南東斜面に挟まれた斜面上には積石塚古墳が多数確認されている。横根・桜井積石塚古墳群と総称され、調査地点の北側1.1kmに東支群（162）、その北西400mに桜井支群（159）、さらに北西800mに桜井内山支群（104）、その西600mに横根支群（103）が位置する。積石塚古墳群としては国内でも有数の規模である。また平野部では、南西500mに太神さん古墳（258）、その西側に近接して藤古墳（257）、琵琶塚古墳（256）が所在する。琵琶塚古墳は、名称や明治期の地籍図などから前方後円墳であった可能性も指摘されるが、現在は削平され畑地となっており、その痕跡は確認できない。

集落は、桜井畑遺跡B地区で古墳時代中期と後期、川田運動場遺跡群で古墳時代後期末葉、道々芽木遺跡で古墳時代後期の竪穴建物を検出しており、特に後期以降にその広がりを確認できる。

古代

奈良・平安時代の遺跡周辺は、『和名類聚抄』にみえる山梨郡 10 郷のうち、表門郷に比定される地域である。北西 1.2km の大坪遺跡 (149) では「甲斐国山梨郡表門」と刻書された土器が出土しており、調査地点の所在地「和戸」は「表門(うわと)」の遺称地とされる。周辺遺跡の多くで集落が確認できるようになり、古代甲斐国の形成と展開を探る上で重要な遺物も多く出土している。

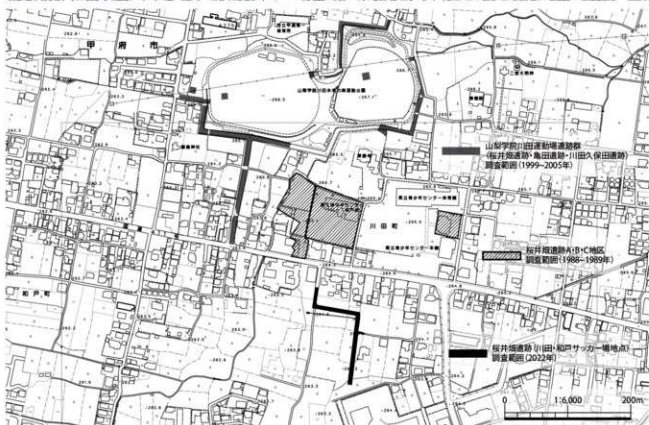
隣接する桜井畑遺跡 A・C 地区と B 地区、川田運動場遺跡群では、奈良時代から平安時代にかけて断続的に集落が営まれており、8 世紀後半の一辺約 8 m の大形竪穴建物や 9 世紀後半の庇付の掘立柱建物などが検出されている他、10 世紀以降の竪穴建物が急増することが報告されている。前述の大坪遺跡では、銅製の鈿帯巡方や瓦塔、鉄鉢形土器などが出土し、周辺地域に役所等の公的な施設や寺院の存在が指摘されている。大坪遺跡の北に隣接する久保田・道々芽木遺跡 (249 ※表 1 では「桜井久保田遺跡」) で竪穴建物から金銅製の海老錠が出土し、その北側に位置する東畑遺跡 (247) でも竪穴建物から小金銅仏 (銅造観世音菩薩立像) が出土している。調査地点の東 200m に近接する外中代遺跡 (243) では、暗文絵画土器が出土した。甲斐型土器の内面に暗文技法で鳥や花が描かれたもので、その一部には魚を捕らえた首の長い鳥の姿があり、鶴鯛魚を描いたものとみられる。

また、大坪遺跡では大量の土師器が出土し、その焼成遺構とみられる土坑も検出していることなどから、甲斐型土器の生産地と考えられている。北 600m の川田窯跡 (174) は 7 世紀末に建立された笛吹市春日居町の寺本庵寺に瓦を供給した生産地、北西 800m の上土器窯跡 (165) も笛吹市一宮町に所在する甲斐国分寺・国分尼寺の瓦の生産地とされており、一帯にある良質な粘土の存在を背景に窯業の拠点としても発展した。

中世・近世

中世では調査地点の北東 500m に川田館跡 (177) がある。川田館は、躰躰ヶ崎の武田氏館が築かれる前の武田氏の居館である。『甲斐国志』は、武田信虎の祖父信昌によって築かれたと推定しており、信虎が躰躰ヶ崎へ居館を選した永正 16 年 (1519) まで半世紀に渡って存続したと考えられている。近辺には「御所曲輪」・「御殿屋敷」・「女中屋敷」・「舞台」など館に関連の深い地名が伝わる。その位置や規模、形態には不明な部分が多いが、1987 年に「御所曲輪」の一部で実施されたトレンチ調査では、15～16 世紀の土師質土器や陶磁器が出土した他、土塁状の遺構も検出されている。また、桜井畑遺跡 A・C 地区の調査で検出された溝や土坑墓、竪穴状遺構の出土遺物には、川田館跡の出土遺物との類似があり、時期的に近接した遺構と指摘されている。

近世には、調査地点の北側に、甲州街道 (甲州道中) が整備された (現在の国道 411 号線)。甲州街道は、江戸日本橋から下諏訪までを結び中山道へとつながる全長 219km の幹線道路で、慶長年間 (1596～1615 年) に江戸幕府の命で整備された五街道の一つである。45 の宿場が設置され、北東 1.2km に位置する石和宿は日本橋から数えて 38 番目の宿場で、寛永年間 (1624～1644 年) には本陣も設置されている。甲州街道の道幅は、『甲州道中宿村大概帳』によれば、川田村 (現川田町) で三間から四間、和戸村 (現和戸町) では七間という。川田運動場遺跡群の調査では、甲州街道に敷設されていたとみられる側溝の一部が検出されている。



第2図 遺跡の位置・周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
103	横根支群	古墳	古墳
104	桜井内山支群	古墳	古墳
105	天王社古墳	古墳	古墳
127	ボンボコ墳	古墳	古墳
130	本郷遺跡	縄文・古墳～	包蔵地
131	本郷 B 遺跡	平安～	散布地
132	本郷 C 遺跡	古墳～中世	散布地
133	酒折縄文遺跡	縄文	散布地
134	内林遺跡	近世	散布地
135	酒折遺跡	近世	散布地
137	大橋遺跡	中世	散布地
138	村内石山遺跡	近世	散布地
139	山崎遺跡	平安～	散布地
140	山田古墳	古墳	古墳
141	山田光福寺遺跡	中・近世	散布地
142	八木沢遺跡	縄文・古墳	散布地
145	矢下大畑遺跡	近世	散布地
146	村内南 A 遺跡	近世	散布地
147	村内南 B 遺跡	近世	散布地
148	神田遺跡	近世	散布地
149	大坪遺跡	古墳～平安	生産跡
150	中屋敷遺跡	縄文・古墳	散布地
151	清水遺跡	中世～	散布地
152	桜井安芸守屋敷跡	近世	散布地
153	船山遺跡	古墳～奈良	散布地
154	十八田遺跡	近世	散布地
155	梅の木遺跡	古墳	散布地
156	見餅遺跡	近世	散布地
157	横田遺跡	近世	散布地
158	長沢遺跡	近世	散布地
159	桜井支群	古墳	古墳
160	新畑遺跡	近世	散布地
161	東組遺跡	古墳	散布地
162	横根・桜井横石塚古墳群東支群	古墳	古墳
163	地藏堂遺跡	縄文・古墳～奈良	散布地
164	上土器遺跡	古墳～平安	散布地
165	上土器窯跡	奈良	生産跡
166	石川遺跡	近世	散布地
167	起田遺跡	古墳	散布地
168	八牧畑 A 遺跡	古墳～	散布地
169	八牧畑 B 遺跡	近世	散布地
170	満々下遺跡	平安～中世	散布地
171	桜井畑遺跡	弥生～平安	包蔵地
172	亀田遺跡	古墳～	散布地
173	川田久保田遺跡	古墳～平安	散布地
174	川田窯跡	奈良	生産跡

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
175	北田遺跡	古墳～平安	散布地
176	北村遺跡	近世	散布地
177	川田館跡	中世	城館跡
203	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
207	居村遺跡	近世	散布地
209	落合氏館跡	中世	城館跡
210	北畑遺跡	古墳～平安	散布地
211	深田遺跡	古墳・中世	散布地
212	五本松遺跡	不明	散布地
213	鎌作遺跡	平安・中世	散布地
214	塚越遺跡	平安	散布地
215	熊社遺跡	弥生～古墳	散布地
217	藤塚古墳	古墳	古墳
218	京塚古墳	古墳	古墳
219	在原塚	古墳	古墳
243	外中代遺跡	古墳～平安	散布地
245	横根村内 1 号墳	古墳	古墳
246	横根村内 2 号墳	古墳	古墳
247	東畑遺跡	古墳～平安	散布地
248	道々芽木遺跡	古墳～平安	散布地
249	桜井久保田遺跡	古墳～平安	散布地
256	琵琶塚古墳	古墳	古墳
257	富士塚古墳	古墳	古墳
258	太神さん古墳	古墳	古墳
286	不老園古墳	古墳	古墳
287	板垣氏屋敷	中世	城館跡
288	酒依氏屋敷跡	中世	城館跡
300	おめ塚古墳	古墳	古墳

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法（第3図）

事業地内では二面のサッカー場建設が計画され、東側のサッカー場の周囲には道路がクランク状に敷設されることとなった。甲府市教育委員会による試掘調査の結果から、この道路予定地とサッカー場に敷設されるネットフェンスの予定地が本調査の対象範囲となった。発掘調査は、道路予定地南東ブロック、続いて中央ブロックおよびネットフェンス部分、最後に北西ブロックの順に進めることとした。また、調査が終了して甲府市教育委員会の確認を受けたブロックは順次、本体工事に明け渡すこととなった。

表土掘削は、0.45m相当のバックホウを使用した。掘削土は、事業地内の隣接地に仮置いた。仮置いた掘削土はブルーシートで覆って養生し、近隣への土砂の飛散防止を図った。安全対策としては事業地全体に本体工事のための仮囲いが施工されており、発掘調査のための仮囲いは設けなかったが、調査区のコーナーには安全コーンを設置し、開口部を明示した。埋め戻しは、本体工事の施工の都合上、行わないこととなった。

調査前の現況は大部分が果樹園であり、発掘調査ではその耕作土をバックホウによる表土掘削の対象とした。それより下位については各地点の調査区壁面沿いにサブトレンチを設定し土層確認しながら、包含層掘削を行い、最終的に地山上面まで掘り下げて遺構検出を行った。遺構検出と遺構掘削は全て人力で行い、遺構検出はジョレンや三角ホーを用いた。遺構掘削は移植ゴテを用い、溝状遺構など掘削深度が深いものには剣スコップも併用した。また、一部の下層確認トレンチの掘削にはバックホウを使用した。

遺構番号は現場調査時に種別に連番で番号を付した。番号は現場調査で使用したものを報告書まで用いたが、方形周溝墓については調査区の形状によって同一とみられる周溝が分断され、別の遺構番号を付していたため、報告書をまとめる過程で方形周溝墓（略号S Z）として新たに番号を付した。遺構測量は、土層断面は手描き実測と写真測量を併用した。平面図はトータルステーション（TOPCON SOKIA CX105）による測量と写真測量による図化を併用した。測量図化システムとしてはCUBIC社「遺構くん」を用いた。写真測量は、写真撮影にミラーレス一眼（SONY α 5100）、写真測量ソフトにAgisoft社「PhotoScan Professional」を用いた。遺構写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（NikonD7100）を使用し、各遺構の土層断面、遺物出土状況、完掘状況の他、調査風景などを記録した。これに加えて各ブロックごとの遺構検出状況や完掘状況は、ドローン（DJI Phantom4Pro）による空中写真またはボール写真撮影を行い、必要に応じて「PhotoScanProfessional」を用いてオルソモザイク写真を作成した。なお、ドローンの機体操縦は有資格者が行い、補助者・監視者を置いて、近隣の安全確保に努めた。遺物は原則的にトータルステーションを使用して位置を記録して取り上げた。小片については、遺構出土のものは遺構一括とし、遺構外出土遺物については10m四方の範囲を目安にまとめて位置を記録し取り上げた。土壌サンプルは竪穴建物のカマドや、土坑、溝状遺構の埋土から採取し、その位置をトータルステーションや遺構断面図で記録した。

発掘調査を進める過程では、各ブロックの表土掘削時、遺構検出時、完掘時など各段階で甲府市教育委員会の確認を受けた。

整理作業は遺物の水洗・注記から開始し、接合・復元と進めた。注記は注記マシンで記し、遺跡名の表記は「サクライC2C」とした。接合にはコニシ社「木工用ボンド」、復元の石膏入れには第一合成社「クレイテックス」を使用した。実測遺物・分析試料・保存処理遺物の選定にあたっては甲府市教育委員会の確認を受けた。遺物の写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（NikonD7500）を用いた。遺物実測は手描きで行った。手描きの遺構実測図・遺物実測図のデジタルトレース、写真データの補正・編集、挿図・写真図版作成、報告書編集作業にはadobe社製「illustratorCC」「PhotoshopCC」「InDesignCC」をそれぞれ使用した。土壌サンプルの水洗・選別と試料の抽出は、昭和測量で行ったものと株式会社パレオ・ラボに委託したものがあがるが、その分析はいずれも株式会社パレオ・ラボが行った。金属製品の保存処理については公益財団法人山梨文化財研究所に委託した。

第2節 基本層序

基本層序は調査区の壁面で観察して記録した。攪乱などを除き、一定の範囲で連続する土層をとらえて基本層序を記録した。現表土をⅠ層、旧耕作土や遺物包含層をⅡ層、地山はⅢ層以降とし、必要に応じて小文字のアルファベットを付与して細分した。

Ⅰ層は、現表土となっている造成土や耕作土である。調査区の大部分は果樹園であったため、一部の地点を除いては耕作土である。

Ⅱ層は、古墳時代や古代の遺物包含層を想定していたが、調査区南西部では削平され遺存していない範囲がほとんどであった。状況に応じてⅠ層の現耕作土と時期差がみられる旧耕作土などもⅡ層を用いて記録した。果樹園の耕作土下に水田の床土が検出される場合などがこれに相当する。調査区中央部では黒褐色砂質シルトや灰黄褐色砂質シルトなどの遺物包含層が遺存しており、Ⅱ a 層やⅡ b 層などと細分して記録した。

Ⅲ層は地山の自然堆積層で、にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする土層である。最終的な遺構検出面も大部分はⅢ層上面であるが、地点によってはⅢ層以下の自然堆積層を確認した。これらはⅣ層・Ⅴ層などとして記録したが、部分的な確認のため以下の地点ごとの概要で記述する。

最終的な遺構検出面とした地山上面の標高は、263.8～264.2mを測る。調査範囲は南北150m、東西90mに及ぶが、ほぼ平坦な地形である。以下、地点ごとに層序の概要を記述する。

S D 1 地点 (第18図)

調査区最南端部に位置する。Ⅰ a 層は層厚約30cmの現耕作土である。遺物包含層はなく、Ⅰ a 層直下が褐色砂質シルトを基調とする地山のⅢ a 層となる。Ⅲ a 層上面で氾濫堆積の北肩部分 (S D 1) を検出した。Ⅲ a 層以下の堆積では、S D 1 の肩部で褐色粗砂のⅢ b 層を確認したが、これより南側では氾濫堆積が厚く、地山は確認できなかった。

S Z 1～3 地点 (第4～8図)

調査区南西部のS Z 1～3付近ではⅠ層は層厚約20cmの現耕作土で、Ⅱ層は層厚約5cmの水田床土である。遺物包含層または方形周溝墓の墳丘の盛土は確認できず、耕作などの土地利用によって削平されたとみられる。Ⅱ層下はⅢ・Ⅳ層とした地山で、にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。Ⅴ層はS Z 1・2の周溝の埋土下で確認したやや低い位置に堆積する地山で、にぶい黄褐色粘土質シルトを基調とする。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層はこの地点では分けて層序名を付したが、標高レベルや土質の差異はわずかで、ほぼ同一の堆積層である。

S I 5 地点 (第14図)

調査区中央部のS I 5付近ではⅠ層は層厚約20cmの現耕作土である。Ⅱ層は3層に分層できる水平堆積層である。Ⅱ a 層は層厚約5cmで、黒褐色砂質シルトを基調とする硬く締まった層である。この面で何らかの整地が行われた可能性があるが、現耕作土直下であり平面的には検出していない。Ⅱ b 層は層厚約15cmで灰黄褐色砂質シルトを基調とする。Ⅱ c 層は層厚10～15cmで黒褐色砂質シルトを基調とする。平安時代の遺物包含層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色砂質シルトの地山である。

S D 14 地点 (第23図)

調査区北西部のS D 14付近ではⅠ層は層厚約35cmの耕作土である。Ⅱ a 層は層厚20～50cmで、暗褐色砂質シルトを基調とする。S D 14の上面を覆う水平堆積層である。遺物包含層と考えたが、出土遺物はほとんどなかった。Ⅲ層以下は地山の自然堆積層である。Ⅲ a 層はにぶい黄褐色砂質シルトで、S D 14はその上面で検出した。Ⅲ b 層はにぶい黄褐色シルト、Ⅳ層は灰黄褐色砂質シルト、Ⅴ層は暗灰黄褐色細砂である。Ⅲ b 層以下の層はS D 14の下層確認で観察した土層であるが、いずれも酸化鉄分を多く含んでおり、S D 14に流水があったことを窺わせる。

第4章 調査の成果

第1節 方形周溝墓

調査区南東部で3基の方形周溝墓の周溝を検出した。周溝は調査区の形状によって分断されており、現場調査時点では溝状遺構としてそれぞれ個別の遺構番号を付与したが報告書をまとめる過程で方形周溝墓（SZ1～3）として新たな遺構番号を付与して整理した。それぞれの周溝は耕作土の表土直下で検出しており、調査区の壁面の土層で精査したが、墳丘の盛土と推定できる堆積は確認できなかった。周溝の内側の部分の平面的な精査でも土坑等は検出できず、墳丘と埋葬施設は削平されたとみられる。またSZ2とSZ3の周溝は、それぞれの一辺が重複しており、その部分からの出土遺物は帰属を明らかにして取り上げることができなくなった。それらの遺物はSZ2・3出土遺物として整理した。

SZ1（第4～6・26図、図版3・15）

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。周溝がSI1・SD4b・SD7と重複しており、切り合いではSD4b・SD7より新しく、SI1に先行する。

[形状・規模] 調査区外に延びており周溝の全容は不明だが、2ヶ所の屈曲部を検出しており、方形を呈すとみられる。周溝一辺の規模は16.2m、軸方向はN-37°-Wと推定する。周溝の幅は1.0～2.5mで遺構検出面からの深さは60cmである。

[埋土] 埋土はレンズ状に堆積し、上層は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層は地山のにぶい黄褐色砂質シルトに黒褐色砂質シルトや褐色細砂などが混じる土層を基調とする。

[出土遺物] 出土遺物のうち、17点を図示した。1・2は縄文土器の深鉢である。沈線文を施した縄文中期初頭の五領ケ台I式土器である。3・4は弥生土器の壺か。縄文地文に沈線文を施しており、弥生時代中期か。5～12は土師器である。5・6は高坏の脚部で外面をヘラミガキし、6は8ヶ所の透孔が確認できるが、合計は10ヶ所と推定できる。7・8は台付甕の脚部で、7の下端部は内側へ折り返す。9・10は甕で、11は壺の底部である。12は手捏ね土器で、内・外面に指頭痕が見られる。13～17は石器で、13～16は黒曜石製である。13は石鏃、14は石核、15・16は剥片である。17は磨石で磨面が2面ある。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期である。

SZ2（第4・6・7・27図、図版4・16）

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。周溝がSZ3・SD4bと重複し、切り合いではもっとも新しい。

[形状・規模] 大部分が調査区外に延びるため全容は不明であるが、屈曲部1ヶ所を検出しており、方形周溝墓の周溝と推定した。周溝の幅は1.8～2.5m、深さ48cmを測る。

[埋土] 埋土はレンズ状に堆積し、黒褐色砂質シルトを基調とする。下層には地山のにぶい黄褐色砂質シルトが混じる。

[出土遺物] SZ2出土遺物として図示した遺物は6点である。18～23は土師器である。18・19は高坏で、18の脚柱部には透孔がある。20・21は台付甕である。22・23は壺で、22の底部には木葉痕が残る。24～28はSZ2・3出土遺物として取り上げた遺物であるが、ここで記述しておく。図示した遺物は5点である。24～27は土師器である。24はくの字口縁の甕である。25・26・27は壺で、27の肩部には櫛描きの直線文と斜列点文が施される。28は石器で、黒曜石の石核である。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期と推定する。

SZ3（第4～7・28図、図版5・17）

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。SZ2・SI1・SD7と重複し、切り合いではSD7より新しく、SZ2とSI1に先行する。

[検出状況・規模] 周溝の全容は不明だが、周溝2辺の大部分と屈曲部1ヶ所を検出した。周溝一辺の規模は15.8m、軸方向はN-46°-Wと推定する。周溝の幅は2.0～3.0mで深さ75cmを測る。

〔埋土〕埋土はレンズ状に堆積し、上層は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層にはにぶい黄褐色砂質シルトなどが混じる。

〔出土遺物・時期〕図示した遺物は8点である。29～35は土師器である。29・30は壺の口縁部である。口縁端部に刺突文が施されており同一個体か。31は高環の脚柱部で、透孔がある。32は台付甕の脚台部である。33・34はくの字口縁の甕で、35は壺の底部である。36は黒曜石の石鏃で、基部は欠損する。

〔時期〕出土遺物から古墳時代前期と推定する。

第2節 竪穴建物

調査区全体で6軒の竪穴建物を検出した。時期別では古墳時代前期と推定されるものが1軒、奈良時代が1軒、平安時代が4軒である。古墳前期と奈良の建物の主軸方向は西に振れている。平安の建物4軒はやや東に振れており、現在の区画の軸方向とほぼ同一である。

S I 1 (第4・5・28図、図版6・17)

〔位置・重複〕調査区南東部に位置する。S Z 1・3、S D 7と重複し切り合いではもともと新しい。

〔形状・規模〕調査区外へ延びており全容は不明だが、竪穴のコーナー部の1ヶ所を検出しており、平面形の形状は方形と推定する。規模は検出部分で長軸3.3m、短軸3.1mで、深さは38cmを測る。主軸方向はN-38°-Wである。

〔検出状況・埋土〕全体の約50%は調査区外である。S Z 1・3の周溝と重複しており、検出時点では平面形を確認できなかったが、調査区壁面の土層を精査して平面形を想定し、堆積土を掘り下げると硬化範囲が遺存する床面を検出できたため、竪穴建物と考えた。また、床面下となるが焼土範囲を確認しており、炬の痕跡の可能性はある。柱穴や周壁溝は確認できなかった。埋土はレンズ状に堆積し、黒褐色砂質シルトや暗褐色砂質シルトを基調とする。掘方にはにぶい黄褐色砂質シルトや褐色灰色粘土質シルトが基調となる。

〔出土遺物〕出土遺物の内5点を図示した。すべて土師器である。37は小形器台である。38は台付甕、39は甕で、40・41は壺である。

〔時期〕図示した遺物は掘方で出土したものが含まれており、重複するS Z 1・3の周溝の遺物が混入している可能性が高い。しかし他時期の遺物は出土しておらず、カマドの痕跡がないことや建物の軸方向などから、古墳時代前期の建物としておきたい。

S I 2 (第9・29図、図版6・7・18)

〔位置・重複〕調査区南東部に位置する。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕平面形は横長の長方形で、規模は長軸3.6m、短軸2.8m、検出面からの深さ24cmを測る。主軸方向はN-12°-Wである。

〔検出状況・埋土〕北西側のコーナー部が調査区外であったが、調査区を拡張して全体を検出した。カマドは北壁東寄りに位置し、煙道部が壁の外側へ長く延びる。煙道は断面形の形状が袋状に遺存しており、規模はカマドの前面からの長さ2.4m(壁面からの突出部分で1.7m)、幅20～40cmである。カマドの焚口とみられる部分では焼土と炭化物の集積範囲を検出した。床面では硬化面や柱穴は確認できなかった。周壁溝は幅25cmで全周する。埋土は暗褐色砂質シルトににぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む。

〔遺物出土状況〕建物の中央とカマドの前面付近の床面で2点の甕が横位で出土した。遺存状態が良くほぼ原位置を保っていると思われる。

〔出土遺物〕図示した遺物は2点の土師器である。42・43は甕で、口縁部はゆるく外反する。またカマド焚口部分で採取した土壌から抽出した炭化材を年代測定したところ、665-708 cal AD (42.44%)、713-717 cal AD (1.24%)、721-774 cal AD (51.77%)の暦年代範囲を示した(第5章第1節)。

〔時期〕出土遺物の年代観と年代測定結果が概ね一致しており奈良時代である。

S I 3 (第10・11・29図、図版8・18)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。S K 8と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 北西部は調査区外であるが、3ヶ所のコーナー部を検出しており、形状は方形を呈す。規模は長軸4.4m、短軸3.6m、深さ32cmを測る。主軸方向はほぼ南北軸と同一である。

[検出状況・埋土] 当初、東側の壁面の立ち上がりとかマドの一部のみを検出したが、全容が推定できるまで調査区を拡張し、南壁の立ち上がりを検出した。北側については調査区壁面の土層で耕作や野焼きによる新しいゴミ穴で攪乱されていることが確認できたため、拡張は行わなかった。カマドは南東隅部に位置する。崩落していたが、軸石や構築材の石、焚口の焼土及びその前面に掻き出された炭化物の集積を検出した。竪穴内の床面上ではS P 7・9を検出した。他にS K 8を検出したが、S I 3の床面より高い位置から掘り込まれた新しい時期の遺構である。また南側の壁沿いに長さ50cmの台状の平石が据えられている。周壁溝は確認できなかった。埋土は上層は黒褐色砂質シルト、下層に灰黄褐色砂質シルトを基調とし、床面直上には貼床状の灰黄褐色細砂の薄い堆積がみられた。

[出土遺物] 出土遺物のうち3点を図示した。44・45は土師器である。44は柱状高台杯である。45は皿で底部がやや肥厚する。46は白磁の碗で、口縁部は玉縁状である。

[時期] 出土遺物から平安時代である。

S I 4 (第12・13・30図、図版9・18)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。S X 4・6と重複し、切り合いでは新しい。

[形状・規模] 形状は長方形で、長軸5.3m、短軸4.3m、検出面からの深さ5cmを測る。主軸方向はN \rightarrow 9 \rightarrow Eである。

[検出状況・埋土] 遺構上面に包含層が遺存していたが、壁面の立ち上がりを確認できなかった。地山上面まで掘り下げて、カマドの痕跡を確認した後に竪穴建物として精査した。このため竪穴の埋土を残すことができず、特に西壁の立ち上がりは不明瞭であった。平面形はカマド位置や床面の硬化面の広がり、周壁溝の検出状況を根拠として推定した。カマドは南東隅部に位置する。崩落しており、構築材の石と焼土・炭化物の集積を確認した。この炭化物を採取して分析したところ、オオムギとマメ科が得られている(第5章第2節)。周壁溝は幅25cmで北壁と東壁に沿って検出した。床面ではS K 9・10とS P 5・6・8、掘方底面でS K 15～17とS P 22・23・25・26・31・32を検出した。S K 16では柱痕の可能性のある堆積を確認したが、他には柱穴の痕跡は確認できなかった。竪穴の埋土は黒褐色砂質シルトや褐色砂質シルトを基調とし、床面は硬く締まる灰黄褐色砂質シルトである。

[出土遺物] 出土遺物のうち3点を図示した(※49・50・52はS K 16出土遺物として後述)。47・48・51は土師器である。47は完形の皿、48は杯である。51は置きカマドの底部である。

[時期] 出土遺物から平安時代である。

S I 5 (第14・15・30図、図版10・19)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。S K 11・S D 9と重複し、切り合いではそれぞれに先行する。

[形状・規模] 形状は方形で、検出部分では長軸4.3m、短軸3.5m、検出面からの深さ5cmを測る。

[検出状況・埋土] 地山上面まで掘り下げてカマドの痕跡を確認した後に竪穴建物として精査した。平面形はカマド位置や調査区北壁の土層観察から推定した。建物の北壁は調査区外で、西壁はS D 9によって攪乱されたとみられる。カマドは南東隅部に位置し、焼土範囲と崩落した構築材の石を検出した。またカマドに重複するS K 13は埋土に石や焼土を含んでおり、先行するカマドの構築材を処分した可能性がある。周壁溝は確認できなかった。床面でS K 12・13、S P 10・11・18・19・20・24を検出している。S P 10・11・18・24は柱痕は確認できなかったが建物の柱穴の可能性があり、柱間は1.4mである。竪穴の埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物のうち5点を図示した(※58はS K 13出土遺物として後述)。53～57は土師器

である。53～55は皿で、ロクロナデし、底部の切り離しは回転系切りである。56は柱状高台皿である。57は甕の底部である。

[時期] 出土遺物から平安時代である。

S I 6 (第15・30図、図版11・19)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。S D 20と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 平面形の全容は不明である。

[検出状況・埋土] 埋土はほとんど遺存しておらず、壁面の立ち上がりは検出できなかった。攪乱されているが焼土範囲を検出してあり、これを竈穴建物の南東カマドと推定して、平面形を想定した。

[出土遺物] 焼土から土師器が1点出土した。59は土師器の坏である。

[時期] 出土遺物から平安時代と推定する。

第3節 土坑・ピット (第2・3表)

調査区全体で土坑(S K) 20基、ピット(S P) 39基を検出した。一部の遺構を除いて一覧表に示す。

S K 1 (第3・16・31図、図版11・19)

[位置・重複] 調査区南東部のS Z 3の周溝の内側に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形は楕円形で、長径76cm、短径67cm、深さ29cmを測る。掘方の断面形はU字形である。

[検出状況・埋土] 上面は攪乱されていたため攪乱として掘り下げたが、下層部分は遺構の埋土が遺存した。遺物も多く混入したため、遺構として記録した。埋土は黒褐色砂質シルトににぶい黄褐色砂質シルトを粒状・ブロック状に含んでおり、炭化物も含む。

[出土遺物] 出土遺物のうち2点を図示した。60・61は土師器の甕で同一個体の可能性もある。

[時期] 出土遺物から平安時代である。

S K 5 (第3・17図、図版11)

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。S X 2と重複し、切り合いでは新しい。

[形状・規模] 平面形は楕円形で、長径96cm、短径75cm、深さ46cmを測る。掘方の断面形は鉢状である。

[検出状況・埋土] 埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

S K 7 (第3・17・31図、図版11・19)

[位置・重複] 調査区中央に位置する。重複はない。

[形状・規模] 平面形は楕円形で、長径2.14m、短径1.03m、深さ30cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 埋土は上層はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。下層には暗褐色粘土質シルトが堆積し、その部分は一段低く土坑状に掘り下がっている。また底面では、短軸方向に横断する浅い溝状の遺構を2条検出している。2条の溝の間隔は97cmである。溝状遺構の底面では酸化鉄分の沈着が確認でき、その部分が水が溜まりやすい構造があったと推定できる。埋葬施設の痕跡と考えたい。

[遺物出土状況] 下層土坑の肩部で、ほぼ完形の土師器の坏が正位の状態では5点出土した。坏は下層土坑の西肩に3点、東肩に2点が並ぶ。下層土坑の底面では金属の刀子とみられる遺物が出土した。

[出土遺物] 出土遺物の内6点を図示した。62～66は土師器の坏である。内外面ロクロナデし、底部の切り離しは回転系切りである。67は金属製品で刀子か。X線写真では2枚の薄板状の金属片の重なりが確認された。下層の埋土から採取した土壌試料の分析ではイネが得られた。

[時期] 土坑の形状や構造、出土遺物から土坑墓の可能性が高い。時期は平安時代である。

S K 8 (第10・11図、図版8)

[位置・重複] 調査区中央部のS I 3内で検出した。S I 3との切り合いは確認できなかった。

[形状・規模] 平面形は円形で、長径75cm、短径66cm、深さ92cmを測る。掘方の断面形は方形に近い。
[検出状況・埋土] 上面を被熱痕のある礫や焼土ブロックが覆っていた。当初はS I 3と別時期のカマドを想定したが、これに対応する竪穴建物は確認できなかった。礫と焼土を除去すると真下から筒状の深い土坑を検出したため、S I 3とは別時期の土坑の埋没の最終段階で礫や焼土が投棄されたものと推定した。埋土は褐灰色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物はないが、埋土の最下層から採取した土壌試料からイネ・オオムギ・コムギが得られた(第5章第2節)。

[時期] 出土遺物はないが、重複関係から少なくとも平安時代以降である。

S K 11 (第14・15図、図版12)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。切り合いではS D 9に先行し、S I 5より新しい。

[形状・規模] 平面形は円形で、径138cm、深さ109cmを測る。掘方の断面形は方形に近い。

[検出状況・埋土] 灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器が数点出土したが図示できない。重複関係から少なくとも平安時代以降である。

S K 13 (第14・15・30図、図版19)

[位置・重複] 調査区中央部のS I 5の床面で検出した。S I 5のカマドと重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] カマドに切られるため全容は不明だが楕円形に近い形状である。長径1.7m、短径0.9m、深さ20cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土は暗褐色砂質シルトや灰黄褐色砂質シルトを基調とし、炭化物や焼土を含む。検出時点ではカマドの一部と想定していたが、断ち割り確認したところ比較的深い掘り込みを確認したため、重複する別土坑とした。底面まで礫や焼土が混入しており、カマドを造り替えて、古いカマドの構築材を投棄した可能性を考えたい。S K 13の炭化物から採取した試料の分析では、オオムギとコムギ、ササゲ属アズキ亜属を得ている。

[出土遺物] 土師器の破片3点が出土し、その内1点を図示した。58は甕の底部である。

[時期] 出土遺物や重複関係から平安時代である。

S K 16 (第12・13・30図、図版12・18)

[位置・重複] 調査区中央部のS I 4の掘方で検出した。重複はない。

[形状・規模] 平面形は円形で、長径65cm、短径60cm、深さ45cmを測る。掘方の形状や埋土から柱穴の可能性はある。

[検出状況・埋土] 埋土は褐灰色砂質シルトを基調とし、柱痕とみられる堆積を確認した。

[出土遺物] 出土遺物のうち3点を図示した。49・50は土師器の坏である。52は砥石で一面に使用面がある。

[時期] 出土遺物から平安時代と推定する

S P 18 (第14図)

[位置・重複] 調査区中央部のS I 5の床面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 形状は楕円形で、長径34cm、短径25cm、深さ30cmを測る。

[検出状況・埋土] 位置関係からS I 5の柱穴の可能性はある。暗褐色砂質シルトを基調とし、下層に炭化物塊を含む。

[出土遺物] 出土遺物はない。土壌試料から抽出した炭化物は同定不能であった。

[時期] S I 5に帰属する遺構で、平安時代である。

S P 21 (第21・22図、図版12・19)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。

[形状・規模] 西側が調査区外のため、全容は不明である。検出部分の長径55cm、短径26cm、深さ31cmを測る。

[埋土] 暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土した遺物は1点で土師器の皿である。

[時期] 出土遺物からは平安時代としておく。

第2表 土坑一覧表

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考	遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SK1	南東部	76	68	29		SK11	中央部	138	138	109	S15より新しい
SK2	南東部	172	99	7		SK12	中央部	108	48	10	S15床面で検出
SK3	南東部	60	60	26		SK13	中央部	171	90	20	S15カマドより古い
SK4	南東部	72	62	16		SK14	北西部	96	57	14	
SK5	南東部	96	75	46		SK15	中央部	90	78	20	S14堀方で検出
SK6	中央部	130	40	22		SK16	中央部	65	60	45	S14堀方で検出
SK7	中央部	214	103	30	土坑墓か	SK17	中央部	157	132	10	S14堀方で検出
SK8	中央部	75	66	92	S13より新しい	SK18	北西部	95	75	14	
SK9	中央部	78	57	10	S14床面で検出	SK19	北西部	67	44	12	
SK10	中央部	72	38	18	S14床面で検出	SK20	北西部	50	45	6	SD13より新しい

第3表 ビット一覧表

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考	遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SP1	南東部	50	36	23		SP21	北西部	55	26	31	
SP2	南東部	25	18	18	SP3より古い	SP22	中央部	46	42	23	S14堀方で検出
SP3	南東部	26	16	24	SP2より新しい	SP23	中央部	35	32	16	S14堀方で検出
SP4	南東部	24	22	15		SP24	中央部	37	28	22	S15床面で検出
SP5	中央部	35	25	13	S14より新しい	SP25	中央部	38	25	14	S14堀方で検出
SP6	中央部	40	31	17	S14床面で検出	SP26	中央部	23	20	-	S14堀方で検出
SP7	中央部	27	25	13	S13床面で検出	SP27	北西部	30	27	23	SD20と重複
SP8	中央部	18	16	18	S14床面で検出	SP28	北西部	41	26	30	SD20と重複
SP9	中央部	18	16	-	S13床面で検出	SP29	北西部	25	21	13	
SP10	中央部	30	26	28	S15床面で検出	SP30	北西部	27	20	30	SD20と重複
SP11	中央部	28	19	15	S15床面で検出	SP31	中央部	21	20	-	S14堀方で検出
SP12	北西部	34	32	30		SP32	中央部	24	23	-	S14堀方で検出
SP13	北西部	23	19	10		SP33	北西部	40	22	16	
SP14	北西部	19	16	6		SP34	中央部	33	27	15	
SP15	北西部	24	22	21		SP35	中央部	51	40	25	
SP16	北西部	38	21	35		SP36	中央部	35	30	14	
SP17	北西部	29	28	22		SP37	中央部	40	30	17	
SP18	中央部	34	25	30	S15床面で検出	SP38	北西部	30	28	18	SK7より新しい
SP19	中央部	25	24	18	S15床面で検出	SP39	中央部	36	29	20	SD10の西側
SP20	中央部	28	22	19	S15床面で検出						

第4節 溝状遺構

調査区全体で21条の溝状遺構を検出した。SD2～6は方形周溝墓の周溝のため、整理作業時にSZ1～3の周溝として遺構番号を振り替えたが、SD4については、現場調査時にSD4aとしていたものをSZ2周溝とし、これに先行する溝状遺構は現場調査時のままSD4bとした。

SD1 (第18図、図版12)

[位置・重複] 調査区南東部の最南端に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 遺構の北肩部分のみ検出した。南肩や東西両側は調査区外へ伸びており、形状や規模は不明であるが、広範囲にわたる堆積と考える。

[検出状況・埋土] 埋土は灰白色細砂や灰色粘土質シルトが互層状に堆積する水成堆積である。サブトレンチで深掘り確認したが、最深部は確認できず広範囲にわたる深い堆積である。試掘調査の結果からもSD1以南は笛吹川からの氾濫堆積が広がっていると推定でき、本調査の対象外となっている。

[出土遺物・時期] 出土遺物はなく時期は不明だが、明治40年の大水害に起因する可能性がある。

SD4b (第4・6・32図、図版4・20)

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。SZ2と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 大部分が調査区外となるため形状・規模は確認できない。

[検出状況・埋土] 検出時点ではSZ2の一部と想定したが、土層断面の観察から先行する別の溝状遺構とした。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物のうち2点を図示した。69・70は土師器の壺である。69は体部下半に最大径を持つ器形である。この壺の中に入っていた土壌を分析したところ、イネやオオムギの炭化種子が得られた。また、そのイネを試料として放射性炭素年代測定を行ったが、1459-1524 cal AD (50.69%)、1560-1564 cal AD (1.16%)、1571-1631 cal AD (43.60%)の暦年代範囲を示した。

[時期] 年代測定の結果は中世となったが、出土遺物と重複関係からは古墳前期と推定する。

SD7 (第4・5・32図、図版20)

[位置・重複] 調査区南東部に位置する。SZ1・3、SI1と重複し、それぞれに先行する。

[形状・規模] 重複により全容は不明である。

[検出状況・埋土] SI1、SZ1・3周溝など遺構の集中部で検出した。それらに帰属する部分と想定していたが、掘り進める過程で別の掘方を検出したため、別の遺構番号を付した。

[出土遺物] 土師器が3点出土し、その内1点を図示した。71はくの字口縁の甕である。

[時期] 出土遺物と重複関係から古墳前期と推定する

SD8 (第19図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へ走る。検出部分では長さ1.3m、幅96cm、深さ42cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 調査区の形状によって分断されるが、南側のSD9と同一の遺構とみられる。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はないが、重複関係より平安時代以降である。

SD9 (第19図、図版12)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。SI5・SK11と重複し、切り合いでは一番新しい。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へ走る。検出部分では長さ6.2m、幅1.1m、深さ30cmを測る。掘方の断面形は皿形である。

[検出状況・埋土] 南側で検出したSD8と同一の遺構とみられる。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はないが、重複関係より平安時代以降である。

SD10 (第20図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へ走る。北東側は調査区外に延びる。検出部分では長さ2.3m、幅50cm、深さ16cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はなく、時期は不明である。

SD11 (第20・32図、図版20)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へ走り、溝の両端とも調査区外へ延びる。軸方向はN-82°-Eである。検出部分では長さ17.5m、幅56cm、深さ27cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 北東側は調査区外へ延びる。南西側は調査区の形状で分断されるが、軸方向や位置関係からSD15につながる同一の遺構と推定する。埋土は黒褐色砂質シルトや暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 数点の土師器が出土しており、2点を図示した。72は台坏壺、73は壺の底部である。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期である。

SD12 (第21図)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。SD19・20と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 東西方向へ走る。西側はSD20に切られ、東側はSD19で切られた後に調査区外へ延びる。長さ3.7m、幅1.0m、深さ16cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はなく、時期は不明である。

SD13 (第21・22図)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。SK20・SD19と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 東西方向へ走る。両端はSK20・SD19に切られて終わる。検出部分では長さ1.2m、幅25cm、深さ7cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器がわずかに出土したが、図示できない。時期は不明である。

SD14 (第23・32図、図版13・20)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へやや湾曲しながら走る。両方向とも調査区外へ延びる。軸方向はN-37°-Eである。検出部分では長さ5.9m、幅3.5m、深さ1.1mを測る。掘方の断面形は鉢状だが、底面で段を持って最深部が凹んでおり、人為的に掘削された溝の可能性もある。

[検出状況・埋土] 検出部分の平面形がやや湾曲していることから、円形に巡る溝状遺構を想定することもでき、今回の調査区内で平面的な精査とサブレンチを設定して遺構の広がりを確認した。しかし遺構の東方向40m、南南西方向10mの範囲内には痕跡がなく、少なくとも円形に巡る溝状遺構ではない。埋土はレンズ状の水成堆積である。上層は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層は酸化鉄分を含む黒褐色粗砂で、特に下層には流水の痕跡が観察できる。

[出土遺物] 出土遺物は非常に少なく、取り上げた遺物は破片資料が8点であった。この内2点を図示した。74は弥生土器で、弥生中期か。75は土器のかわらけか。図示した以外に縄文土器もあるがいずれも小片で摩滅が激しい。また、土層断面で採取した土壌から得られた炭化材を放射性炭素年代測定した。測定結果は349-308 cal BC (25.65%)、207-99 cal BC (67.98%)、69-58 cal BC (1.82%)の暦年代範囲を示した。[時期] 出土遺物が少なく時期の決め手を欠くため年代測定を試みた。測定結果は弥生時代中期を示した。弥生中期とみられる遺物も1点出土しているが、他の遺物とは推定年代に隔たりがある。遺構の時期は判断し難い。

SD15 (第25図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。SD17と重複し、切り合いでは先行する。

[形状・規模] 北東方向から南西方向へ走る。軸方向はN-82°-Eである。検出部分では長さ3.2m、幅72cm、深さ13cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] 南西方向は調査区外へ延び、北東方向は調査区で分断されているが、SD11と軸方向が一致しており、位置関係からも同じ遺構と推定する。埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器が1点出土したが、図示できない。S D 11 と同一遺構とみられるため古墳時代前期としておく。

S D 16 (第 25 図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 南北方向に走り、両方向とも調査区外へ延びる。検出部分では長さ 1.5m、幅 1.9m、深さ 34cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物はなく、時期は不明である。

S D 17 (第 25 図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。S D 15 と重複し、切り合いでは新しい。

[形状・規模] 北東方向から南西方向に走り、両方向とも調査区外へ延びる。検出部分では長さ 2.2m、幅 56cm、深さ 12cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物はない。重複関係から古墳時代前期以降である。

S D 18 (第 25 図)

[位置・重複] 調査区中央部に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 北西方向から南東方向へ走り、両方向とも調査区外へ延びる。検出部分では長さ 2.2m、幅 1.5m、深さ 34cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はなく、時期は不明である。

S D 19 (第 24 図、図版 14)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。S D 12・13、S X 7 と重複し、それらより新しい。

[形状・規模] 南北方向に走り、北側は調査区外へ延びる。軸方向はN-7°-Eで、現在の区画の軸方向とほぼ重なる。検出部分では長さ 8.0m、幅 80cm、深さ 29cmを測る。

[検出状況・埋土] 現道の直下で検出した。S D 20 と並走しており、その芯々距離は 3.2mである。上面は現道の造成土や新しい時期の耕作土が覆う。検出時は埋土や上面の遺物から近代以降の擾乱と考えたが、調査区北壁に残った土層断面を精査したところ、S D 19・20 間で道路の路面と推定できる硬く締まった層を複数検出した。平面的に路面を確認することはできなかったが、S D 19・20 については近代以前に遡る可能性のある旧道路の側溝として記録を行った。溝の上部は新しい時期の耕作土で埋まっていたが、底面付近にはぶい黄褐色砂質シルトを基調とした埋土が遺存する。

[出土遺物・時期] 出土遺物はないが、並走する S D 20 と同時期の遺構と考える。その開削時期は少なくとも近代以前に遡る可能性があり、その後、改修されつつ近年まで継続的に使用され続けたとみられる。S D 20 とともに条里にかかわる道路状遺構の可能性がある。

S D 20 (第 24・32 図、図版 14・20)

[位置・重複] 調査区北西部に位置する。S I 6・S K 19・S P 28・S P 29・S P 30・S D 12 と重複し、S I 6・S K 19・S D 12 より新しい。S P 28・29・30 との新旧は確認できなかった。

[形状・規模] 南北方向へ走り、北側は調査区外へ延びる。軸方向はN-6°-Eである。検出部分では長さ 19.8m、幅 98cm、深さ 20cmを測る。

[検出状況・埋土] 現道直下で検出しており、S D 19 と並走する。埋土は黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器が1点出土した。76 は皿で、平安時代の遺物である。遺構の時期は、並走する S D 19 と同時期で、その開削時期は少なくとも近代以前に遡る可能性があり、その後、改修されつつ近年まで継続的に使用され続けたとみられる。S D 19 とともに条里にかかわる道路状遺構の可能性がある。

第5節 不明遺構・試掘調査出土遺物

調査区全体で不明遺構（SX）として記録したのは8基である。SX7以外については、断削確認を行った確認し、SX1・4・6は風倒木痕、SX2・3・5・8は自然堆積層と推定している。ここでは出土遺物のあった不明遺構と試掘調査出土遺物について記述する。

SX4（第25・32図、図版14・20）

〔位置・重複〕調査区中央部に位置する。SI4と重複し、切り合いでは先行する。

〔形状・規模〕形状は不整形である。長軸4.4m、幅2.7m、深さ90cmを測る。

〔検出状況・埋土〕SI4の掘方より外側で検出したものをSX4、SI4の掘方内で検出したものをSX6としたが、埋土は同様で切り合いも確認できないことから同じ遺構とみている。埋土は黒褐色砂質シルトにぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む層が複数重なっており、平面形も不整形であるため、風倒木痕と推定した。

〔出土遺物〕出土遺物のうち3点の土師器を図示した。77は器台、78は二重口縁の壺、79は甕の底部である。

〔時期〕出土遺物と重複関係から古墳時代前期から平安時代にかけての遺構である。

SX6（第25・32図、図版14・20）

〔位置・重複〕調査区中央部に位置する。SI4と重複し、切り合いでは先行する。

〔形状・規模〕形状は不整形である。長軸2.3m、幅1.5m、深さ23cmを測る。

〔検出状況・埋土〕埋土は黒褐色砂質シルトにぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む。SX4と同じ風倒木痕と推定する。

〔出土遺物〕土師器が8点出土し、その内1点を図示した。80は壺の頸部である。

〔時期〕古墳時代前期から平安時代にかけての遺構である。

SX7（第21・22・32図、図版20）

〔位置・重複〕調査区北西部に位置する。SP38・SD19と重複し、それぞれに先行する。

〔形状・規模〕平面形は不整形で、長軸2.5m、幅1.1m、深さ22cmを測る。

〔検出状況・埋土〕比較的広範囲に浅い掘り込みが広がっていたが、床面や焼土、炭化物などは確認できなかった。埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

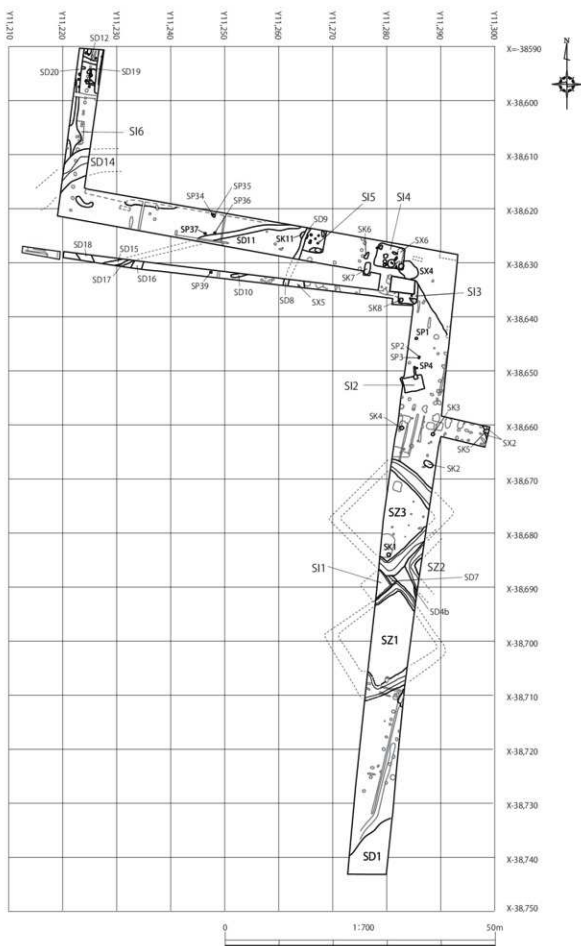
〔出土遺物〕土師器が1点出土し、図示した。81は土師器の坏である。

〔時期〕出土遺物から平安時代である。

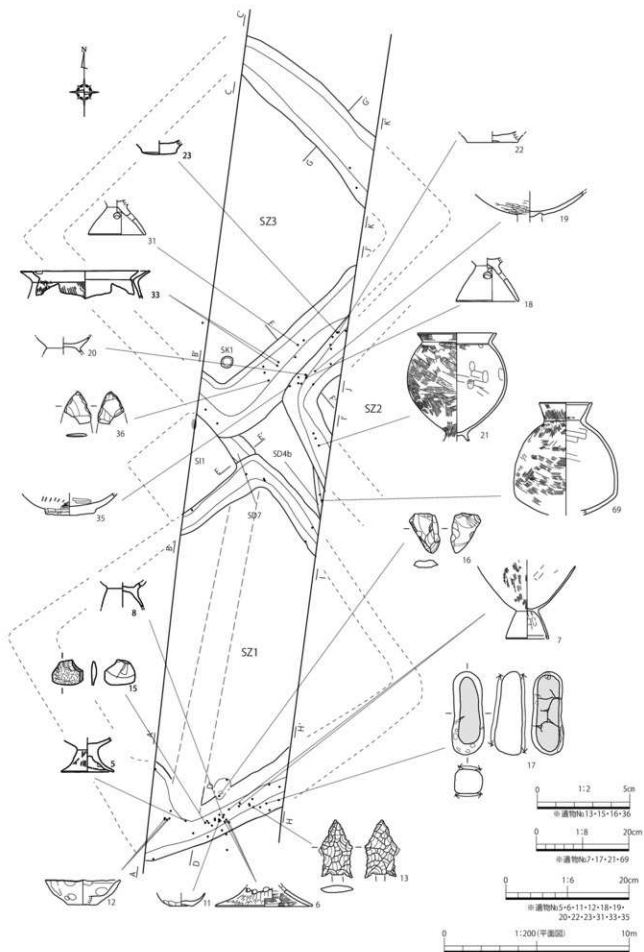
試掘調査出土遺物（第33図・図版21）

82は灰軸陶器、83～92・95は土師器、93は石器である。ほとんどが今回の調査対象外となったT2からの出土遺物で、本調査ではあまり出土しなかった平安時代前半の遺物も含まれている。

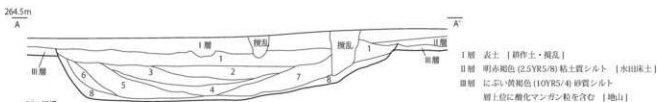
82は灰軸陶器の壺の口縁部である。83は玉縁口縁の皿である。84～88は坏で、85・86・88は玉縁口縁である。89は脚高台杯、90は小形の甕である。91は蓋で、宝珠形のつまみ部分である。92は完形品だが器種不明である。外形は釣り鐘形で、外面全面には甲斐型土器の初期にみられるような丁寧なミガキが施される。天面には外径1.2cmの孔がある。93は石器で、黒曜石の石鎌である。94は近世の土製品で土鈴である。95はほぼ完形の坏である。



第3図 遺構全体図

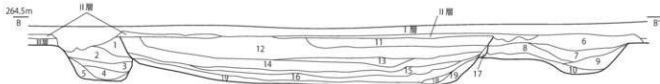


第4図 SZ1~3・SD4b・SD7(1)



SZ1 母境

- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト粒状に混じる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト塊状に混じる
に灰黄褐色(10YR5/4) シルトブロック状に混じる
- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト混じる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(5YR3/2) 粘土質シルトブロック状に混じる よく絡まる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(10YR5/4) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(5YR3/2) 粘土質シルトブロック状に混じる よく絡まる
- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(10YR5/4) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
暗赤褐色(5YR3/2) 粘土質シルトブロック状に混じる よく絡まる



SZ3 母境

- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
灰褐色(5YR5/2) シルト粒状に混じる
 - 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
褐色(10YR4/4) 極細粒砂粒状に混じる
 - に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
褐色(10YR4/4) 極細粒砂 ブロック状に混じる
 - に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/3) シルト混じる
 - に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
灰褐色(5YR5/2) 粘土質シルト粒状に混じる
- SZ3 母境**
- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト混じる
赤褐色(5YR4/6) シルト粒状に混じる 層上位に酸化マンガン粒含む
 - 黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる
 - 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
褐色(10YR4/4) シルト混じる
 - 暗赤褐色(5YR3/3) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる
 - に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
灰黄褐色(10YR4/2) シルト混じる

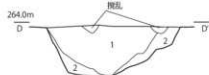
SI1

- 暗褐色(10YR3/4) 砂質シルト
褐色(10YR4/4) シルト粒状に混じる
- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
炭化物極微量含む
- 暗褐色(10YR3/2) 砂質シルト
赤褐色(5YR4/6) 細粒砂粒状に混じる
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
黒褐色(10YR4/4) 粘土質シルトブロック状に混じる
炭化物少量・粘土質微量を含む
- 黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト
褐色(10YR4/4) 粘土質シルト塊に混じる よく絡まる [粘床]
- 黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト
に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる [継方]
- 灰褐色(10YR4/1) 粘土質シルト
褐色(10YR4/4) 粘土質シルト
黄土多く含む
- に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト混じる [継方]



SZ3 母境

- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/3) シルト粒状に混じる
- 黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト
褐色(7.5YR4/3) シルト粒状に混じる
- に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト混じる
- 極暗赤褐色(7.5YR2/3) 砂質シルト
- 暗赤褐色(5YR3/2) 砂質シルト
に灰黄褐色(7.5YR6/3) シルト粒状に混じる
- オリブ褐色(2.5Y4/4) 砂質シルト
に灰黄褐色(7.5YR6/3) シルト粒状に混じる
- に灰黄褐色(10YR5/4) 砂質シルト
に灰黄褐色(10YR5/3) シルト混じる 酸化マンガン粒含む



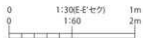
SZ1 母境

- 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト
絡まりあり 炭化物 1% 含む
- に灰黄褐色(10YR4/3) 砂質シルト
黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト含む

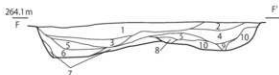


SD7

- 黒褐色(10YR2/2) 砂質シルト
硬く締まる [SI1 硬化面]
- 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト [SI1]
- 暗褐色(10YR3/2) 砂質シルト
灰黄褐色(10YR4/2) 砂質シルトブロック状に含む
- に灰黄褐色(10YR4/2) 砂質シルト
灰黄褐色(10YR4/2) 砂質シルトブロック状に含む
- 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質シルト
炭化物 1% 含む
- 暗褐色(10YR3/2) 砂質シルト
白色粒 1% 含む
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
黄土・炭化物粒状に 1% 含む 酸化マンガン粒 2% 含む
- 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト
褐色(10YR4/4) 砂質シルトブロック状に含む 酸化マンガン粒 2% 含む
- 褐色(10YR4/4) 砂質シルト
白色粒 3% 含む [地山]



第5図 SZ1~3・SD4b・SD7(2)



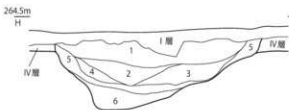
SD3 同溝-SZ3 同溝

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 硬く締まる
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト 硬く締まる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトブロック状に含む
- 4 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトブロック状に含む
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む [SZ2 埋溝理上]
- 6 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトブロック状に含む [SZ3 埋溝理上]
- 8 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトブロック状に含む [SZ2 埋溝理上]
- 9 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 砂質シルトブロック状に含む [SZ2 埋溝理上]
- 10 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトブロック状に含む [SZ2 埋溝理上]



SZ3 同溝

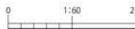
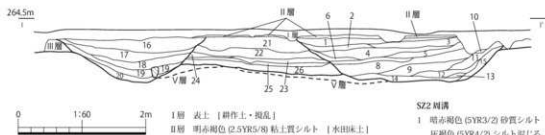
- 1 黒褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 硬く締まる
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルトブロック状に含む
- 4 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルトブロック状に含む
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルトブロック状に含む
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
- 7 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルトブロック状に含む



- I層 表土 [耕作土・坩堝]
IV層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト [地山]

SZ1 同溝

- 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) シルト混じる 遺物含む
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) シルト粒状に混じる
- 3 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) シルト混じる
- 4 灰褐色 (5YR4/2) 砂質シルト
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 暗赤褐色 (5YR2/2) 粘土質シルトブロック状に混じる
- 6 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂



- I層 表土 [耕作土・坩堝]
II層 暗赤褐色 (2.5YR5/6) 粘土質シルト [水田床土]
III層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 層上位に酸化マンガンを含む [地山]
V層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト [地山]

SZ2 同溝

- 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR4/2) シルト混じる 層上位に酸化マンガンを含む
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質シルト 明褐色 (7.5YR5/6) シルト粒状に混じる
- 3 灰褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト混じる 明褐色 (7.5YR5/6) シルト粒状に混じる
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック状に混じる
- 5 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト混じる
- 7 赤黒褐色 (2.5YR2/1) 粘土質シルト
- 8 暗赤褐色 (2.5YR3/3) 砂質シルト
- 9 黒褐色 (10YR3/2) シルト
- 10 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトのブロック土
- 11 黒褐色 (5YR3/1) 砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト混じる
- 12 暗赤褐色 (2.5YR3/1) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) シルト粒状に混じる 炭化物少量含む
- 13 黒褐色 (5YR3/1) 粘土質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト混じる
- 14 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 明褐色 (7.5YR5/6) シルト粒状に混じる
- 15 にぶい黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトブロック状に混じる 酸化マンガンを含む

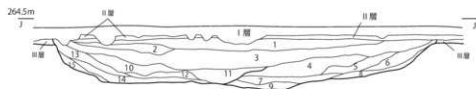
SZ1 同溝

- 16 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) シルト粒状に混じる 層上位に酸化マンガンを含む
- 17 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) シルト粒状に混じる
- 18 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
- 19 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 炭化物極微量に含む
- 20 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂ブロック状に混じる

SD4b

- 21 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 明褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト混じる 層上位に酸化マンガンを含む
- 22 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 暗褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト混じる にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細粒砂ブロック状に混じる
- 23 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトブロック状に混じる
- 24 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト粒状に混じる 締まりや中強い
- 25 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘土質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒状に混じる
- 26 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒状に混じる 遺物を含む

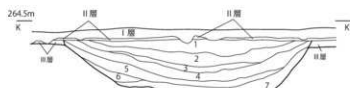
第6図 SZ1~3・SD4b・SD7(3)



- I層 表土 [耕作土・覆土]
 II層 明赤褐色 (2.5YR5/8) 粘土質シルト [水田床土]
 III層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 層上位に酸化マンガン粒を含む [地山]

SZ2 周溝・SZ3 周溝

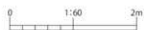
- 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト にぶい赤褐色 (5YR4/3) 粘土質シルトに混じる 層上位に酸化マンガン粒を含む
- 2 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質シルト にぶい赤褐色 (5YR4/3) 粘土質シルトに混じる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (7.5YR4/3) シルトがブロック状に混じる 炭化物・粘土類混在 遺物を含む
- 4 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂がブロック状に混じる 炭化物極微量混在 [SZ3 埋土]
- 5 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト 明褐色 (7.5YR5/6) シルトが粒状に混じる 遺物を含む [SZ3 埋土]
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂がブロック状に混じる [SZ3 埋土]
- 7 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト [SZ3 埋土]
- 8 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトがブロック状に混じる 酸化マンガン粒を含む [SZ3 埋土]
- 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂 径2～10㎜混在 [SZ3 埋土]
- 10 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 褐色 (7.5YR4/3) シルト混在、明褐色 (7.5YR5/6) シルトが粒状に混じる [SZ2 埋土]
- 11 暗褐色 (2.5YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/6) 極細粒砂がブロック状に混じる 炭化物多く含む 遺物を含む [SZ2 埋土]
- 12 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト 炭化物少量混在 遺物を含む [SZ2 埋土]
- 13 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトがブロック状に混じる [SZ2 埋土]
- 14 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂がブロック状に混じる [SZ2 埋土]
- 15 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト 酸化マンガン粒混在 [SZ2 埋土]



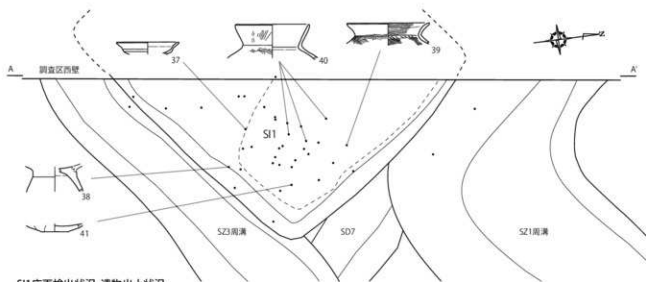
- I層 表土 [耕作土・覆土]
 II層 明赤褐色 (2.5YR5/8) 粘土質シルト [水田床土]
 III層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 層上位に酸化マンガン粒を含む [地山]

SZ3 周溝

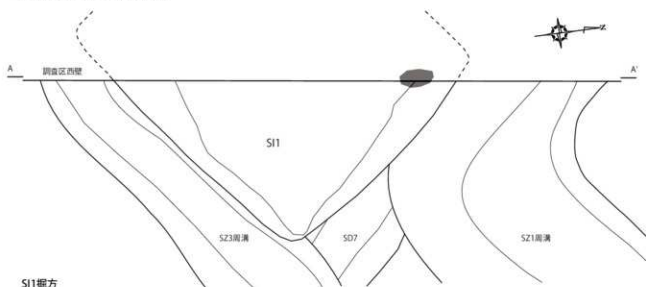
- 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトが粒状、赤褐色 (5YR4/6) 極細粒砂が粒状に混じる
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 褐色 (7.5YR4/3) シルトが粒状に混じる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (7.5YR4/3) シルトがブロック状に混じる
- 4 極細粒褐色 (7.5YR2/3) 砂質シルト にぶい褐色 (7.5YR6/3) シルトが粒状に混じる
- 5 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト にぶい褐色 (7.5YR6/3) シルトが粒状に混じる 遺物を含む
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質シルト にぶい褐色 (7.5YR6/3) シルトが粒状に混じる 酸化マンガン粒を含む
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト にぶい黄褐色 (7.5YR5/3) シルトに混じる 酸化マンガン粒を含む



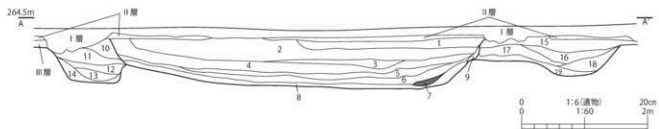
第7図 SZ1～3・SD4b・SD7(4)



S11床面検出状況・遺物出土状況



S11掘方



I層 表土・掘削土

II層 暗赤褐色 (2.5YR5/8) 粘土質シルト [水田床土]

III層 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト [地山]

S11

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) シルト粒状に混じる
- 2 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 炭化物 1% 含む
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 赤褐色 (5YR4/6) 細砂粒状に含む
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルトブロック状に含む
炭化物・焼土粒状に 1% 含む
- 5 黒褐色 (10YR2/1) 粘土質シルト
褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト少量含む 硬く締まる [顆米]
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト
に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトブロック状に含む [飯方]
- 7 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト 焼土多く含む [焼土層]
- 8 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 黒褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト少量含む [飯方]
- 9 褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト [飯方]

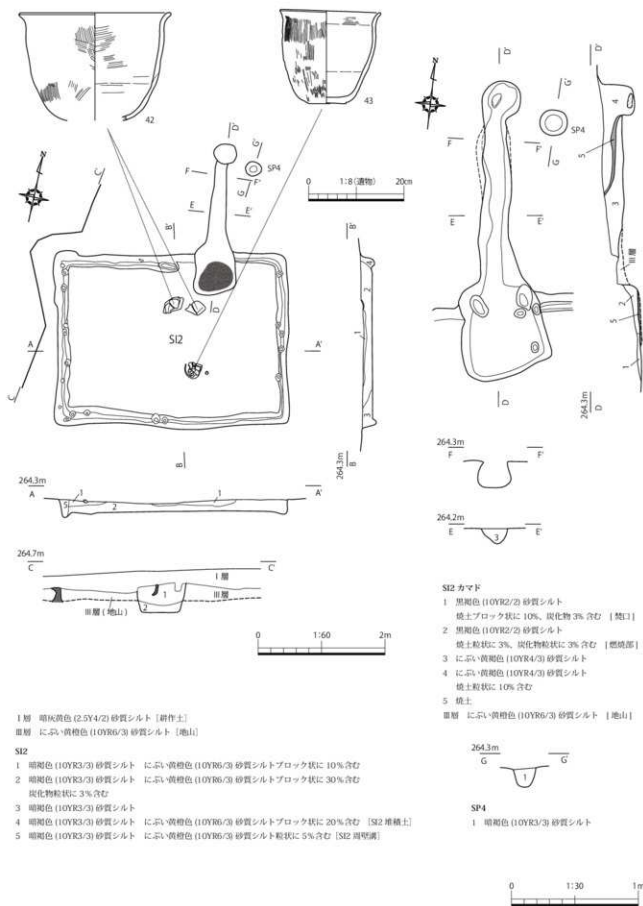
SZ1 溝

- 10 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) 細砂を粒状に含む
- 11 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 細砂を粒状に含む
- 12 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 細砂をブロック状に含む
- 13 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト に近い黄褐色 (10YR5/3) シルト少量含む
- 14 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 灰褐色 (5YR5/2) 粘土質シルト粒状に含む

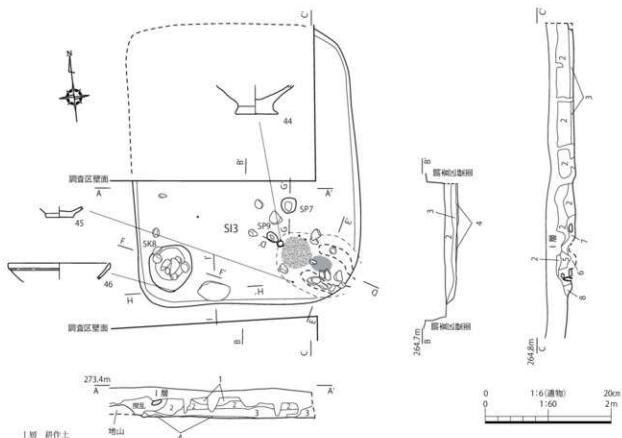
SZ3 溝

- 15 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト少量含む
- 16 赤褐色 (5YR4/6) シルトを粒状に含む 層上位に酸化マンガン粒含む
- 17 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト
に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトをブロック状に含む
- 18 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR4/4) シルト少量含む
- 19 暗赤褐色 (5YR3/2) 砂質シルト
に近い黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルトをブロック状に含む
- 20 に近い黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトを少量含む

第8図 S11



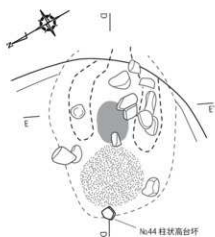
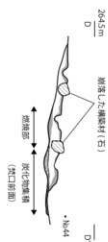
第9図 SI2



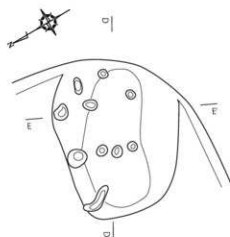
I 層 耕作土

SI3

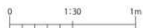
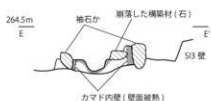
- | | |
|---|---|
| <p>1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト</p> <p>2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトをブロック状に 10% 含む</p> <p>3 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトを粒状に 3% 含む</p> <p>4 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂 [床面]</p> | <p>5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトブロック状に 7% 含む</p> <p>6 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 焼土・炭化物粒状に 3% 含む [カマド崩壊土]</p> <p>7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 焼土ブロック状に 10% 含む [カマド崩壊土]</p> <p>8 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトブロック状に 30% 含む [カマド崩壊土]</p> |
|---|---|



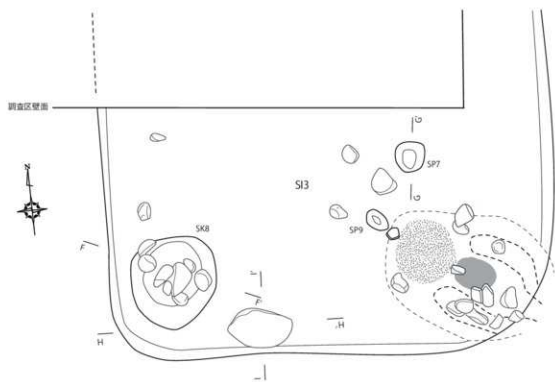
SI3 カマド検出状況



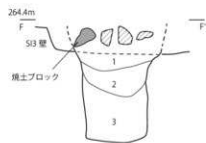
SI3 カマド掘方



第10図 SI3(1)

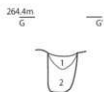


SI3床面直上平石エレベーション図



SK8

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 焼土・炭化物粒状に 7% 含む
上面で基石・焼土ブロックを検出
- 2 褐色 (10YR4/1) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトブロック状に 30% 含む
- 3 褐色 (10YR4/1) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトを粒状に 10% 含む ※土壌サンプル採取

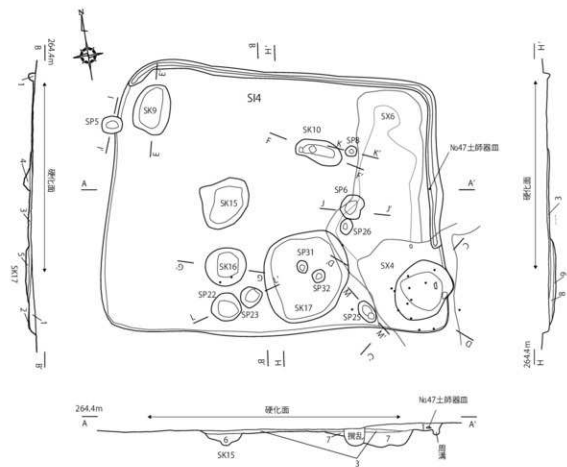
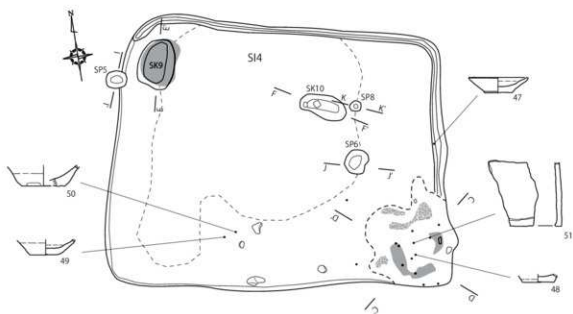


SP7

- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂 ※SE3の床面直上の増積と同質の埋土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂 炭化物粒状に 1% 未満含む



第11図 SI3(2)

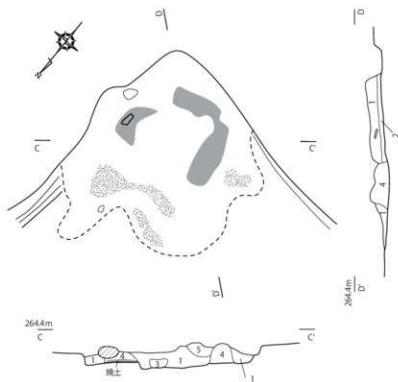


S14

- 1 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
にふい-黄褐色(10YR5/4)砂質シルトブロック状に10%含む
- 2 褐色(10YR4/4)砂質シルト [S14埋積土]
- 3 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト
上面は硬く締まる硬化面
- 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト
にふい-黄褐色(10YR5/4)砂質シルトをブロック状に10%含む
- 5 褐色(10YR4/1)砂質シルト 炭化物粒状に3%含む [SK17埋土]
- 6 褐色(10YR4/1)砂質シルト
にふい-黄褐色(10YR5/4)砂質シルトをブロック状に10%含む [SK15埋土]
- 7 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
にふい-黄褐色(10YR5/4)砂質シルトブロック状に30%含む [SK0埋土・根木堀か]
- 8 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト [SK17埋土]
- 9 褐色(10YR4/1)砂質シルト
にふい-黄褐色(10YR5/4)砂質シルト10%含む 炭化物部分的に含む [SK17埋土]



第12図 S14(1)



S14 カマド

- 1 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト
焼土・炭化物粒状に 3% 含む [80°埋積土]
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト [ブロック土]
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト
焼土粒状に 3% 含む 硬く締まる [カマド軸か]
- 5 1 に焼土ブロック 10% 含む



SK9

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
焼土・炭化物粒状に 7% 含む
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト



SK10

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
炭化物粒状に 3% 含む
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトブロック状に 10% 含む



SK16 ※S14 床下で検出

- 1 暗灰色 (10YR5/1) 砂質シルト
 - 2 暗灰色 (10YR5/1) 砂質シルト
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト 5% 含む
炭化物少量含む [柱頭か]
- ※S14 床下で検出



SP5

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト



SP6

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
締まりゆるい ※掘見か



SP8 エレベーション図



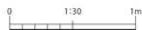
SP22・23

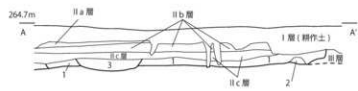
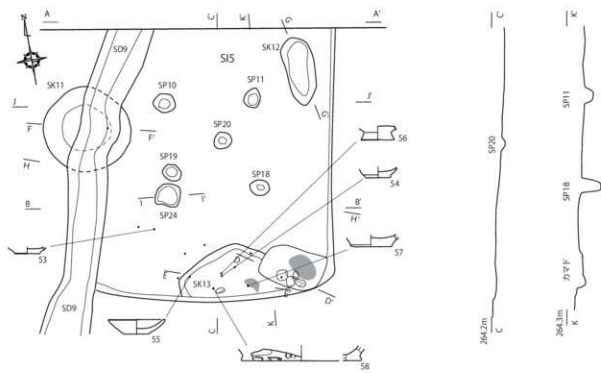
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト



SP25 ※S14 床下で検出

- 1 暗灰色 (10YR5/1) 砂質シルト
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト 30% 含む
焼土・炭化物粒状に 3% 含む

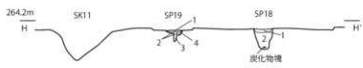




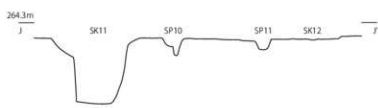
- | | |
|--|---|
| <p>I層 耕作土</p> <p>IIa層 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト 硬く締まる 粗砂3%含む</p> <p>IIb層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト 粗砂1%含む</p> <p>IIc層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト</p> <p>III層 濃い黄褐色(10YR5/3)砂質シルト [地山]</p> | <p>1 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
に濃い黄褐色(10YR5/3)砂質シルトブロック状に10%含む [S15埋土]</p> <p>2 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト [S15埋土]</p> <p>3 濃い黄褐色(10YR5/3)砂質シルト
灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトブロック状に30%含む [SD9埋土]</p> |
|--|---|



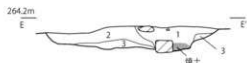
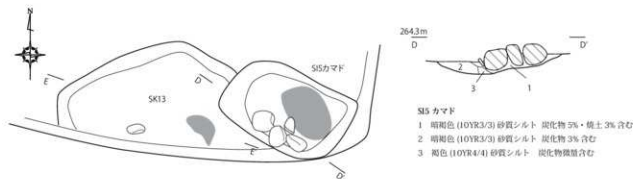
- S15
- 1 褐色(2.5Y4/4)砂質シルト
黒褐色(10YR3/3)砂質シルトブロック状に10%含む
 - 2 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト 粗砂10%含む



- SP18
- 1 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト 炭化物1%含む
 - 2 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 炭化物塊含む
- SP19
- 1 暗褐色(10YR4/4)砂質シルト 炭化物1%
 - 2 褐色(10YR4/6)砂質シルト
 - 3 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト [木根腐乱]
 - 4 濃い黄褐色(10YR4/3)砂質シルト

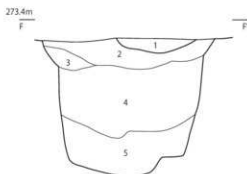


第14図 S15(1)



SK13

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 炭化物 10%・焼土 5% 含む
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 炭化物粒径に 1%・焼土粒状に 3% 含む
3 濃い黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト 炭化物微量含む



SK11・SD9

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
黒褐色 (10YR3/1)シルト質粘土をブロック状に 2% 含む 炭化物微量含む [SD9]
2 灰黄褐色 (10YR4/2)シルト質粘土 [SK11]
3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土 [SK11]
4 暗灰色 (10YR6/4)シルト質粘土
高細小粒状の酸化鉄分 10% 含む [SK11]
5 黒褐色 (10YR3/2) 粘土
褐色 (10YR4/4)シルト質粘土をブロック状に 3% 含む
底面に酸化鉄分の沈着 [SK11]



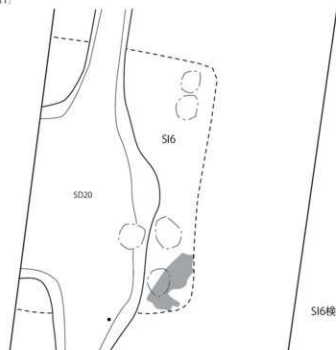
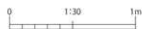
SK12

- 1 褐色 (10YR4/4)砂質シルト
黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトブロック状に 30%含む

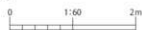


SP24

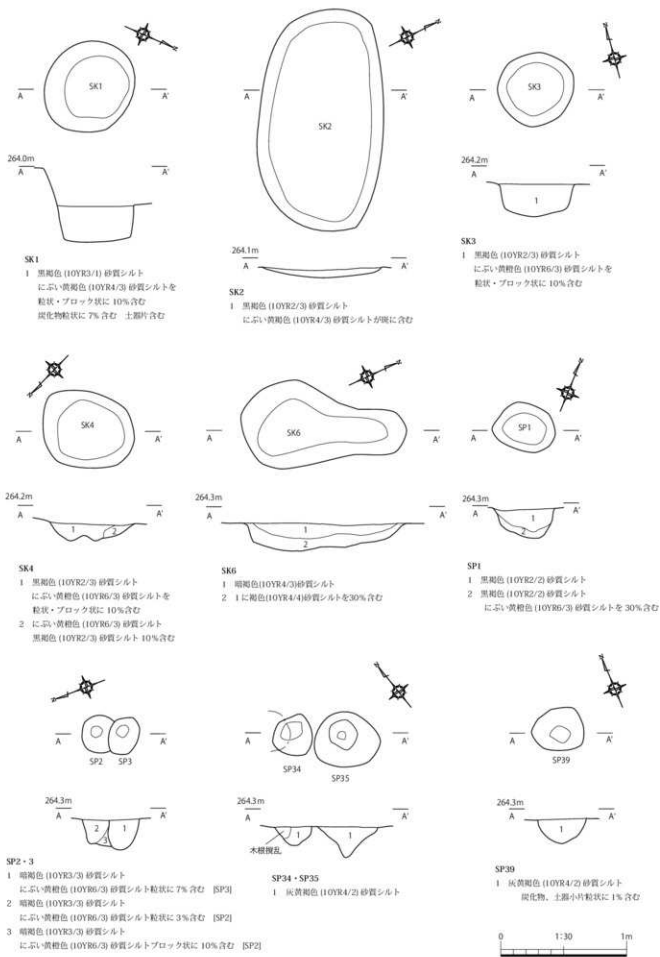
- 1 暗褐色 (10YR4/4)砂質シルト 炭化物 1% 含む
2 暗褐色 (10YR3/3)砂質シルト
褐色 (10YR4/4)砂質シルトブロック状に 3%含む



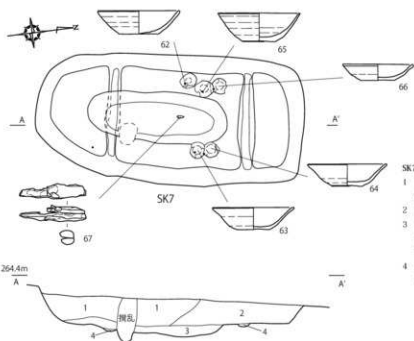
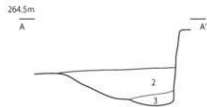
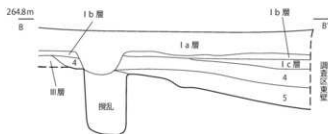
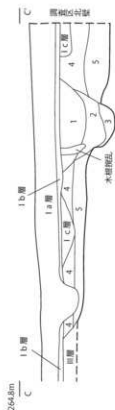
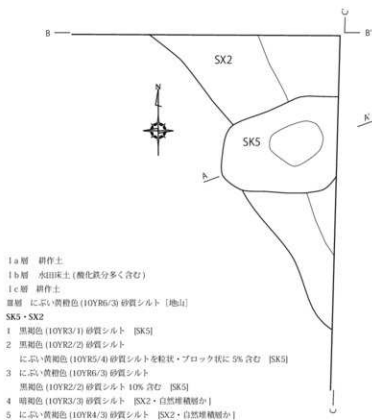
S16検出状況



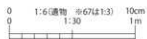
第15図 S15(2)・S16

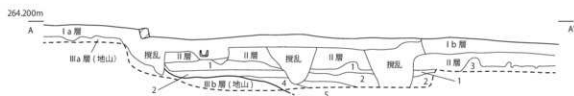
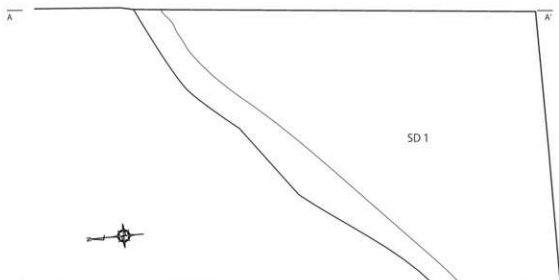


第16図 SK1~4・SK6・SP1~3・SP34・SP35・SP39



第17図 SK5・SK7・SX2



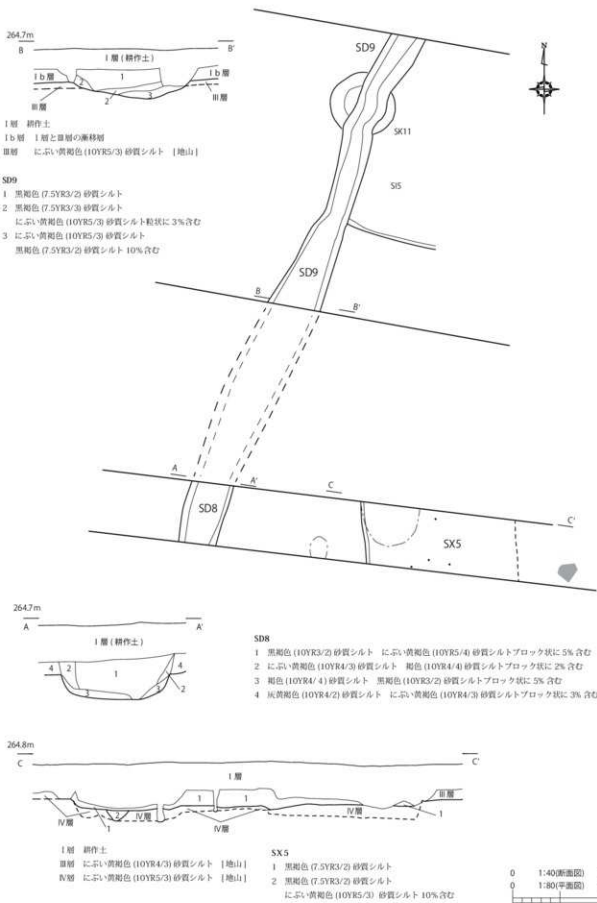


- Ia層 取壊作土
- Ib層 造成土(盛土)
- II層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂に
灰白色(7.5Y8/1)細砂5%含む [埋壊作土]
- IIIa層 褐色(10YR4/4)砂質シルト [地山]
- IIIb層 褐色(10YR4/4)粗砂
礫化成分10%含む [地山]

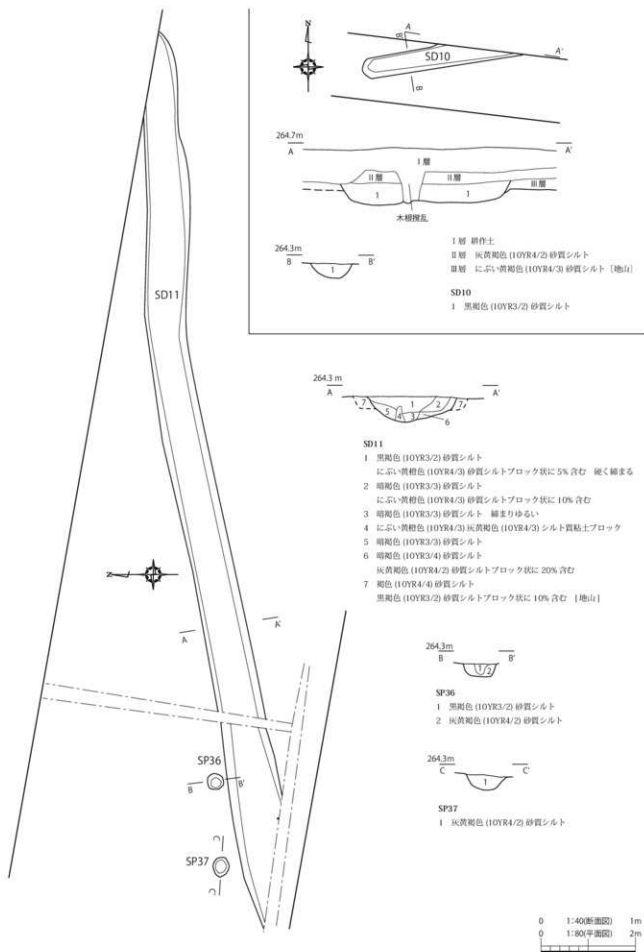
- SD1**
- 1 灰白色(7.5Y8/1)細砂に
灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルト層状に30%含 礫化成分層状に10%含む
 - 2 灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト
 - 3 灰白色(7.5Y8/1)細砂に
灰色(7.5Y6/1)細砂うすく互層状に30%含む
 - 4 灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトに
黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト互層状に5%含む
 - 5 黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルトに
灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト30%含む



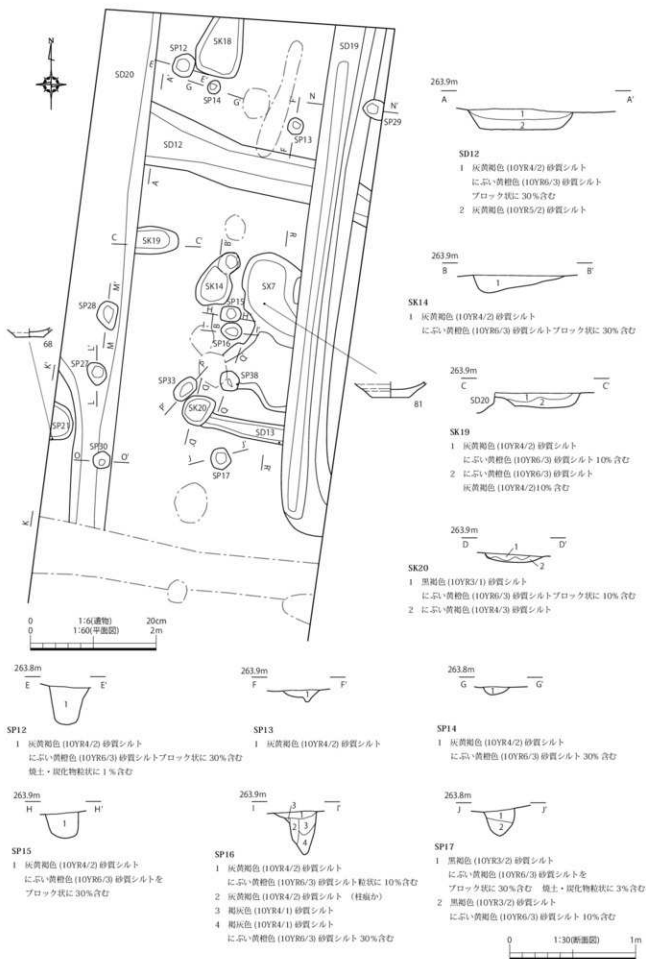
第18図 SD1



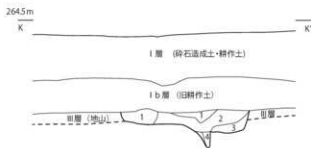
第19図 SD8・SD9・SX5



第20図 SD10・SD11・SP36・SP37

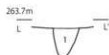


第21図 SD12・SK14・SK19・SK20・SP12~17



SP21

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルト 10%含む
- 4 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト



SP27

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト・焼土・炭化物粒状に 10%含む



SP28

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 焼土・炭化物粒状に 3%含む
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルト 10%含む



SP29

- 1 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト



SP30

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトブロック状に 10%含む



SP33

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルト 10%含む



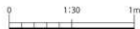
SP38

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトをブロック状に 10%含む

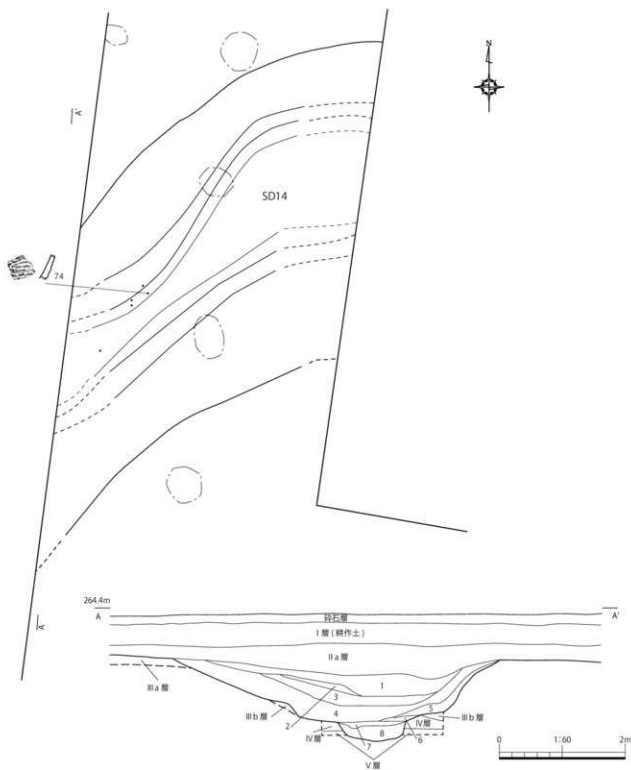


SD13・SX7

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトブロック状に 10%含む [SX7 埋土]
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトブロック状に 30%含む [SX7 埋土]
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/3) 砂質シルトブロック状に 30%含む 焼土・炭化物粒状に 1%含む [SD13 埋土]



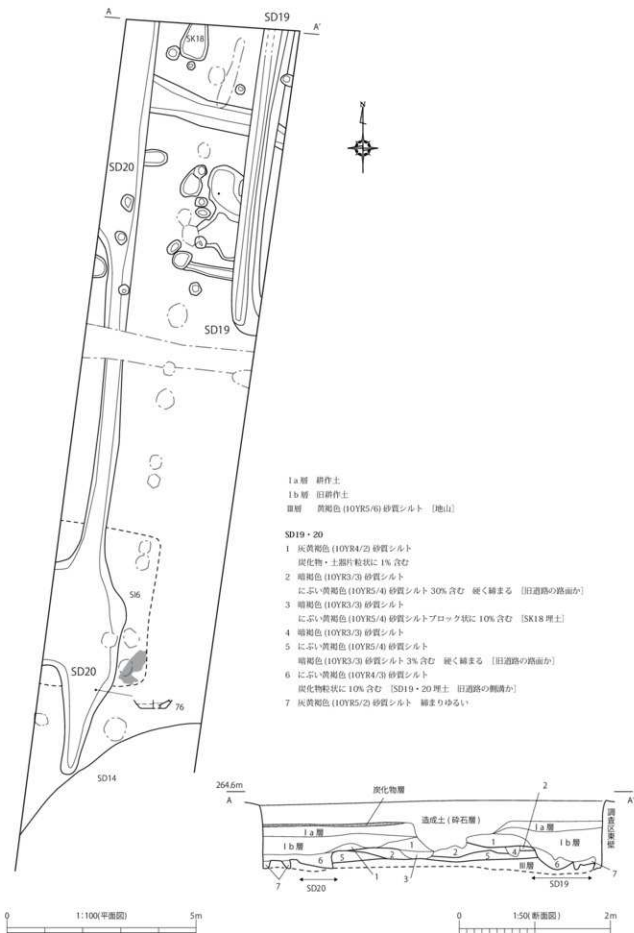
第22図 SD13・SP21・SP27～30・SP33・SP38・SX7



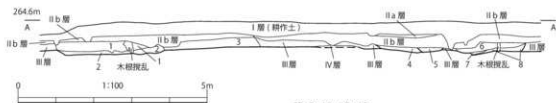
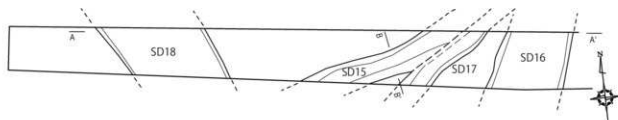
- I層 耕作土
- IIa層 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
- IIa層 にふい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト [地山]
- IIb層 にふい黄褐色 (10YR5/4) シルト
酸化鉄分7%含む [地山]
- IV層 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
酸化鉄分7%含む [地山]
- V層 暗灰褐色 (2.5YR4/2) 細砂
酸化鉄分7%含む [地山]

- SD14
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 褐色 (10YR3/2) 粗砂ブロック状に10%含む
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 酸化鉄分3%含む
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい黄褐色 (10YR6/4) シルトブロック状に30%含む
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂 酸化鉄分3%含む
- 7 黒褐色 (10YR3/2) 粗砂 酸化鉄分3%含む
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 粗砂 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック状に30%含む

第23図 SD14



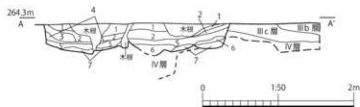
第24図 SD19・SD20・SK18



- SD15・16・17・18
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト [SD18]
 - 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト [SD18]
 - 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトをブロック状に30%含む
※平面的には検出できなかった溝状遺構
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトをブロック状に30%含む [SD15]
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト [SD17]
 - 6 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
炭化物・土器片粒状に1%含む [SD16]
 - 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂 [SD16]
 - 8 にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト [SD16]



- SD15
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト
にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトブロック状に30%含む
 - 2 にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト
黒褐色 (10YR3/3) 砂質シルト10%含む

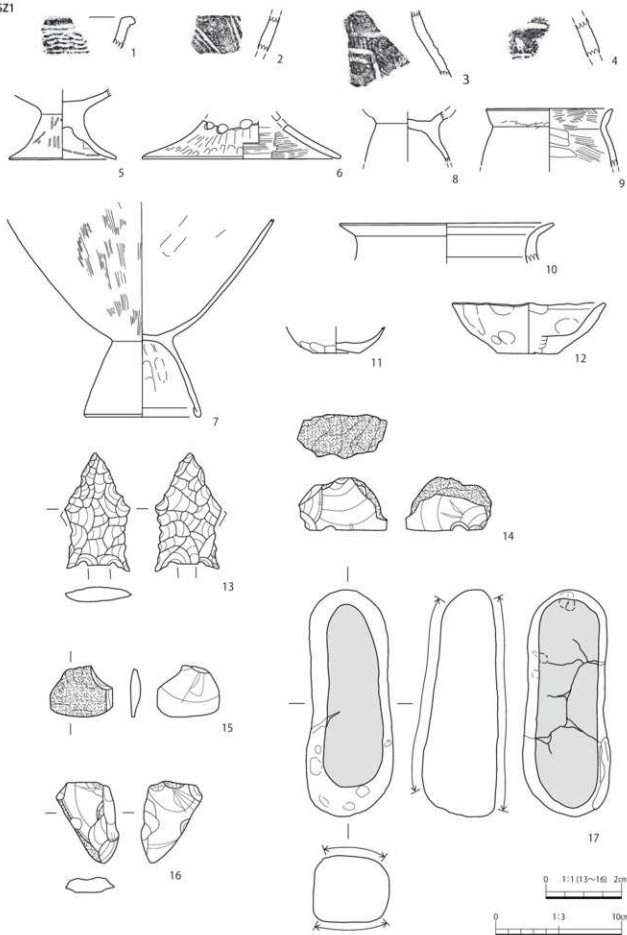


- SX4
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトをブロック状に7%含む
 - 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトを粒状に7%含む
 - 4 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトをブロック状に30%含む
 - 5 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトをブロック状に10%含む
 - 6 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
 - 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト にふい・黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルトをブロック状に30%含む



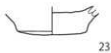
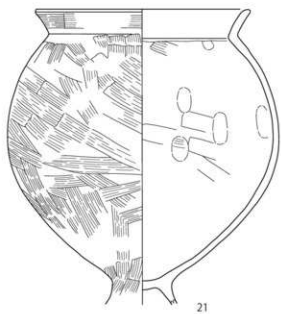
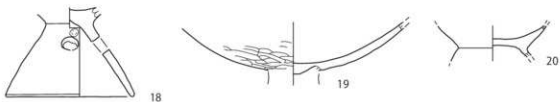
第25図 SD15~18・SX4・SX6

SZ1

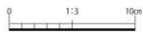
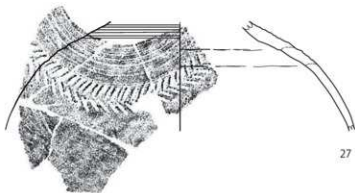
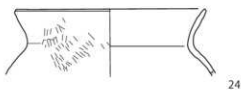


第 26 图 SZ1 出土遺物

SZ2

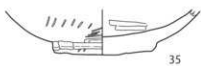
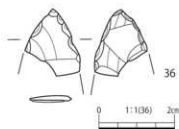
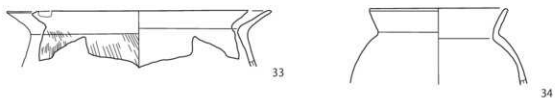
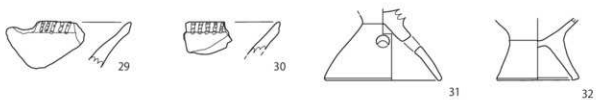


SZ2・3

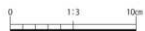
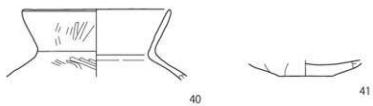
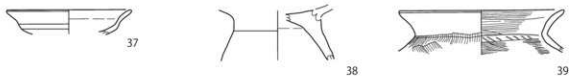


第27図 SZ2・3出土遺物

SZ3

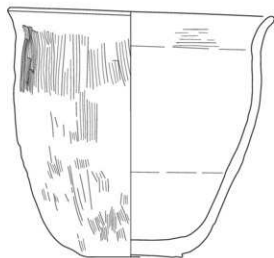
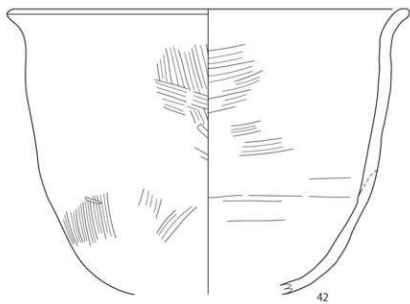


S11

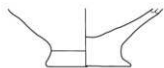


第28圖 SZ3・S11出土遺物

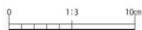
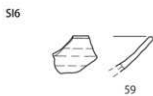
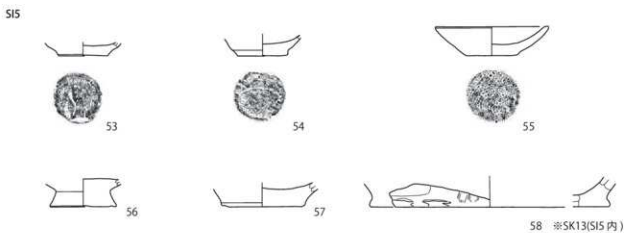
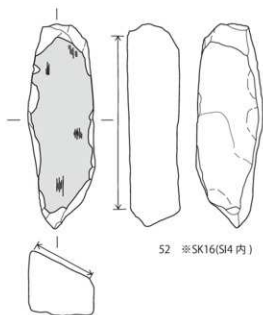
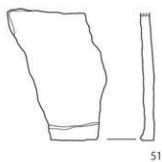
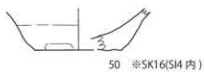
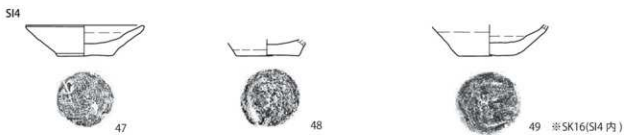
S12



S13

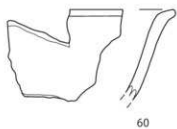


第29図 S12・S13出土遺物

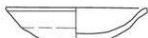


第30図 S14~6出土遺物

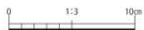
SK1



SK7

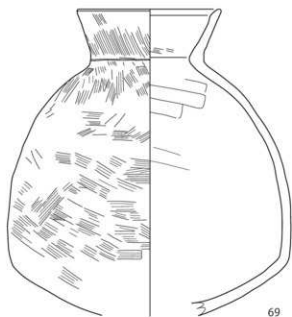


SP21

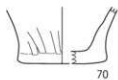


第31図 SK1・SK7・SP21出土遺物

SD4b



69



70

SD7

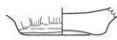


71

SD11



72



73

SD14



74



75

SD20

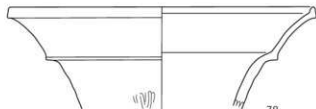


76

SX4



77



78



79

SX6

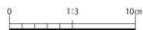


80

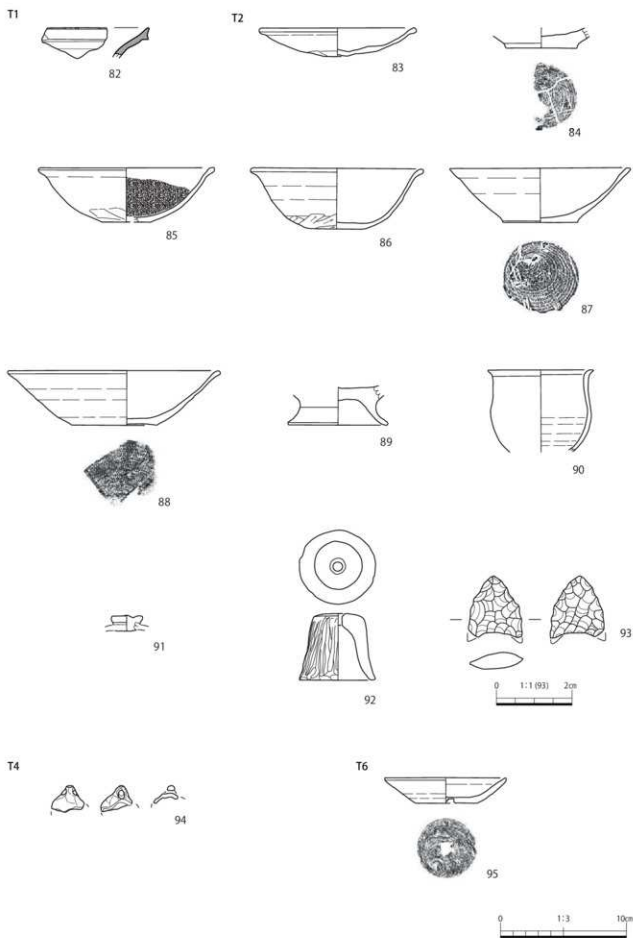
SX7



81



第 32 図 SD4b・SD7・SD11・SD14・SD20・SX4・SX6・SX7出土遺物



第 33 図 試掘調査出土遺物 (T1・T2・T4・T6)

表4 遺物観察表（土器・土製品）1

発掘 層位 番号	発掘 時期	出土地点	種別	形態	部位	遺長(mm)			重量(g)	外径・直径	外底・底面	胎土・製造法		胎土・土質		胎土・含有物	特徴	製成年代
						A	B	C				内径	外周	産部	成形			
1	26	15	S21	縄文土器	竪形	口縁部小	-	-	12.0	-	-	-	3YR5/4に引い・赤褐色	3YR5/4に引い・赤褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	縄文前期	
2	26	15	S21	縄文土器	竪形	胴部小	-	-	6.0	-	-	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	縄文前期		
3	26	15	S21	縄文土器	竪形	胴部小	-	-	6.0	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	縄文中期		
4	26	15	S21	土器類	竪形	胴部小	-	-	3.0	-	-	3YR5/6赤褐色	3YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期		
5	26	15	S21	土器類	竪形	胴部小	-	-	0.6	0.5	0.2	10B2/6褐色	10B2/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期		
6	26	15	S21	土器類	竪形	胴部小	-	-	15.8	3.1	1.0	10B2/6褐色	10B2/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期		
7	26	15	S21	土器類	打割	体部1/4～胴部	-	-	9.0	10.7	指押形遺物	-	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
8	26	15	S21	土器類	打割	体部小	-	-	3.0	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
9	26	15	S21	土器類	竪	口縁部小	10.0	-	6.0	12.0	子	-	2YR5/7褐色赤褐色	2YR5/7褐色赤褐色	繊維状白磁石	良好	古墳前期	
11	26	15	S21	土器類	竪	口縁部小	17.0	-	3.2	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石	良好	古墳前期	
11	26	15	S21	土器類	竪	口縁部小	17.0	-	3.2	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石	良好	古墳前期	
11	26	15	S21	土器類	打割	体部1/2～胴部1/2	13.2	-	0.0	4.0	子	指押形	-	10B2/6褐色	10B2/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期
18	27	16	S22	土器類	竪形	胴部小	-	-	10.0	7.1	0.2	子	3YR5/6赤褐色	3YR5/6赤褐色	繊維状白磁石	良好	古墳前期	
19	27	16	S22	土器類	打割	体部1/2	-	-	3.0	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
20	27	16	S22	土器類	打割	体部1/2	-	-	3.0	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
21	27	16	S22	土器類	打割	体部1/2	-	-	3.0	子	子	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
22	27	16	S22	土器類	竪	口縁部小	16.8	-	12.3	1.7	子	子	3YR5/6赤褐色	3YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
23	27	16	S22	土器類	竪	口縁部小	-	-	8.2	子	子	本製造	5YR8/4に引い・赤褐色	5YR8/4に引い・赤褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
24	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	5.3	0.2	-	-	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石	良好	古墳前期	
25	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	5.3	子	子	-	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
25	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	5.3	子	子	-	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
25	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	5.3	子	子	-	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
26	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	5.0	0.2	子	子	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤褐色・黒色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
27	27	16	S22・3	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	3.0	子	子	指押文・斜行点文	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
29	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	-	-	3.0	1.0	子	子	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
30	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	-	-	2.0	子	子	指押文	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
31	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	-	-	0.0	0.2	子	子	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
32	28	17	S23	土器類	打割	体部小	-	-	6.2	0.0	0.2	子	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
33	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	12.0	-	4.5	子	子	子	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
34	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	11.0	-	6.0	子	子	子	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色・黒色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
35	28	17	S23	土器類	竪	口縁部小	11.0	-	7.8	0.0	0.2	子	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
36	28	17	S31	土器類	打割	口縁部1/4～胴部小	19.0	-	3.0	0.2	子	子	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤色磁石	良好	古墳前期	
38	28	17	S31	土器類	打割	口縁部1/4	-	-	3.0	子	子	子	3YR5/6赤褐色	3YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
39	28	17	S31	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	3.0	1.0	子	子	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色磁石	良好	古墳前期	
40	28	17	S31	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	3.0	子	子	子	2YR7/6褐色	2YR7/6褐色	繊維状白磁石・赤褐色磁石	良好	古墳前期	
41	28	17	S31	土器類	竪	口縁部小	13.0	-	4.2	1.0	子	子	5YR6/4に引い・褐色	5YR6/4に引い・褐色	繊維状白磁石・赤褐色磁石	良好	古墳前期	
42	29	18	S2	土器類	竪	口縁部1/2～胴部1/2	13.0	-	12.3	1.0	子	子	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	
43	29	18	S2	土器類	竪	口縁部小	20.8	-	8.4	19.8	子	子	2YR5/6赤褐色	2YR5/6赤褐色	繊維状白磁石・赤褐色・赤色雲母(僅少)	良好	古墳前期	

第4表 遺物観察表 (土器・土製品) 2

観測 番号	器種 名称	出土地点	層位	I. 測定寸法 (cm)			観測・観察方法			胎土色調			胎土色特徴	構成	備考	
				A	B	C	内径 (深部)	外径 (深部)	底径	内径	外径	底径				胎土色調
44	29	18	513	土師器	粗粒系灰赤	—	(6.5)	(4.5)	ナナ	ナナ	底径6.4cm	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
45	29	18	513	土師器	皿	—	4.3	(3.7)	ナナ	ナナ	底径6.4cm	2.3YR7.4C(2)赤褐色	2.3YR7.4C(2)赤褐色	良好	良好	多摩時代
46	29	18	513	白磁	皿	口縁部小	(16.0)	—	(2.6)	口径ナナ	口径ナナ	7.5R6.1白	7.5R6.1白	良好	良好	平安時代
47	30	18	514	土師器	皿	内底	9.3	4.5	2.4	ナナ	底径6.4cm	5YR6.4C(2)赤褐色	5YR6.4C(2)赤褐色	良好	良好	平安時代
48	30	18	514	土師器	片	底面	—	4.9	(3.3)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
49	30	18	514	土師器	片	底面	—	4.7	(2.6)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
50	30	18	514	土師器	片	底面	—	17.0	(3.3)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
51	30	18	514	土師器	器口下	底面	—	(10.5)	ナナ	ナナ	—	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
52	30	19	515	土師器	皿	口縁部小	—	3.9	(1.1)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.4C(2)赤褐色	5YR6.4C(2)赤褐色	良好	良好	平安時代
53	30	19	515	土師器	皿	口縁部小	—	14.0	(3.2)	口径ナナ	口径ナナ	2.3YR7.6褐色	2.3YR7.6褐色	良好	良好	多摩時代
55	30	19	515	土師器	皿	口縁部小	—	4.2	2.3	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.4C(2)赤褐色	5YR6.4C(2)赤褐色	良好	良好	平安時代
56	30	19	515	土師器	粗粒系灰赤	底面	—	(5.4)	(2.2)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
57	30	19	515	土師器	皿	底面	—	6.6	(3.0)	—	—	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
58	30	19	515	土師器	皿	底面	—	(17.0)	(2.4)	ナナ	ナナ	5YR7.6褐色	5YR7.6褐色	良好	良好	平安時代
59	30	19	515	土師器	片	口縁部小	—	—	(2.8)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
60	31	19	581	土師器	皿	口縁部小	—	(4.8)	ハナ	ハナ	—	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
61	31	19	581	土師器	皿	底面	—	(13.0)	(4.8)	ハナ	ハナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
62	31	19	587	土師器	片	口縁部小	(12.0)	6.2	3.2	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
63	31	19	587	土師器	片	口縁部小	(13.0)	5.8	3.5	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
64	31	19	587	土師器	片	口縁部小	(13.0)	4.8	3.5	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
65	31	19	587	土師器	片	口縁部小	(13.0)	5.1	4.5	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
66	31	19	587	土師器	片	口縁部小	(11.0)	5.4	2.6	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
68	31	19	5921	土師器	皿	底面	—	4.5	(1.4)	口径ナナ	口径ナナ	底径6.4cm	2.3YR7.6褐色	良好	良好	平安時代
69	32	20	524b	土師器	皿	口縁部小	(11.5)	—	(2.6)	ハナ	ハナ	—	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
70	32	20	524b	土師器	皿	底面	—	(7.0)	(4.5)	ナナ	ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
71	32	20	507	土師器	皿	口縁部小	(18.0)	—	(3.5)	ナナ	ナナ	2.3YR7.6褐色	2.3YR7.6褐色	良好	良好	多摩時代
72	32	20	5011	土師器	粗粒系灰赤	底面	—	—	(2.3)	ナナ	ナナ	10YR7.4C(2)赤褐色	10YR7.4C(2)赤褐色	良好	良好	多摩時代
73	32	20	5011	土師器	皿	底面	—	6.8	(2.3)	ナナ	ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
74	32	20	5014	赤土器	不明	底面	—	—	(4.1)	ナナ	ナナ	2.3YR6.2赤白	2.3YR6.2赤白	良好	良好	多摩時代
75	32	20	5014	土器	器口下	底面	—	(4.0)	(1.5)	ナナ	ナナ	2.3YR6.2赤白	2.3YR6.2赤白	良好	良好	多摩時代
76	32	20	5020	土師器	皿	底面	—	(3.0)	(1.3)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.4C(2)赤褐色	5YR6.4C(2)赤褐色	良好	良好	平安時代
77	32	20	504	土師器	皿	口縁部小	(9.0)	—	(2.8)	ナナ	ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
78	32	20	504	土師器	皿	口縁部小	(24.0)	—	(8.2)	ナナ	ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	多摩時代
79	32	20	504	土師器	皿	底面	—	(6.0)	(1.8)	ナナ	ナナ	2.3YR6.2C(2)赤褐色	2.3YR6.2C(2)赤褐色	良好	良好	多摩時代
80	32	20	506	土師器	皿	底面	—	—	(4.0)	ナナ	ナナ	5YR7.6褐色	5YR7.6褐色	良好	良好	多摩時代
81	32	20	507	土師器	片	口縁部小	—	(4.0)	(2.5)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代
82	33	21	111	灰褐色土器	皿	口縁部小	—	—	(2.4)	口径ナナ	口径ナナ	5YR7.0暗褐色	5YR7.0暗褐色	良好	良好	平安時代
83	33	21	111	土師器	皿	口縁部小	(12.6)	6.0	(3.3)	口径ナナ	口径ナナ	5YR6.5褐色	5YR6.5褐色	良好	良好	平安時代

第4表 遺物観察表 (土器・土製品) 3

発掘 番号	発掘 層位	出土地点	種別	種類	部位	寸法(mm)			重量(g)	土色	胎土色調	胎土含有物	焼成	備考	調査年代			
						A	B	C										
84	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/3	—	5.6	1.6	口口口子	口口口子	外底(裏面)	外底	黒砂状赤色の胎土	5YR6/4に2-3ノ境	良好	内底全体に土文付着 玉環口縁	平安時代
85	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/2~ 底辺1/3	(4.8)	(4.8)	(4.8)	口口口子	平底(今欠)	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	7.5YR6/4	良好	玉環口縁	平安時代
86	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/4~底辺	(3.6)	4.6	4.8	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR6/4	良好	玉環口縁	平安時代
87	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/2~底辺	(4.1)	6.0	4.3	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR6/4	良好	玉環口縁	平安時代
89	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/2~底辺	(4.8)	(4.8)	(4.8)	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR7/6	良好	玉環口縁	平安時代
90	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/2~底辺	(4.8)	(4.8)	(4.8)	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR7/6	良好	玉環口縁	平安時代
91	33	21	庭園72	土師器	片	口縁1/2~底辺	(4.8)	(4.8)	(4.8)	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR7/6	良好	玉環口縁	平安時代
92	33	21	庭園72	土製品	不明	底面	—	6.0	5.3	へうま子片	へうま子片	へうま子片	へうま子片	黒砂状赤色の胎土	2.5YR6/4	良好	空面(今欠) 外面に外底(今欠)の境	平安時代
94	33	21	庭園74	土製品	土師	1/25径	(3.1)	(2.6)	2.5	—	—	—	—	黒砂状赤色の胎土	5YR6/3	良好	玉環口縁	平安時代
95	33	21	庭園76	土師器	片	口縁1/3	9.6	4.8	2.0	口口口子	口口口子	口口口子	口口口子	黒砂状赤色の胎土	5YR7/6	良好	玉環口縁	平安時代

第5表 遺物観察表 (石器・石製品) 1

発掘 番号	発掘 層位	出土地点	種別	種類	部位	寸法(mm)			重量(g)	土色	胎土色調	胎土含有物	焼成	備考				
						A	B	C										
13	26	15	S21	石器	石錐	一部欠損	(3.2)	(1.7)	0.4	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—
14	26	15	S21	石器	石錐	—	1.4	2.4	1.2	3.1	—	—	—	—	—	—	—	—
15	26	15	S21	石器	石錐	—	1.3	1.6	0.3	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—
16	26	15	S21	石器	石錐	—	2.1	1.7	0.4	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—
17	26	15	S21	石器	石錐	背面	(16.0)	6.9	6.0	1197.5	—	—	—	—	—	—	—	—
28	27	16	S27-3	石器	石錐	—	1.5	2.4	1.0	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—
36	28	17	S23	石器	石錐	—	(3.8)	(3.4)	(8.1)	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—
52	30	18	SK16(S49)	石製品	砥石	片面	16.2	(5.1)	4.2	629.4	—	—	—	—	—	—	—	—
93	33	21	庭園72	石器	石錐	一部欠損	(1.7)	(1.4)	0.4	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—

第6表 遺物観察表 (金属製品) 1

発掘 番号	発掘 層位	出土地点	種別	種類	部位	寸法(mm)			重量(g)	土色	胎土色調	胎土含有物	焼成	備考			
						A	B	C									
67	31	19	S07	金属	刀身等	5.3	1.2	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第5章 自然科学分析

第1節 桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）出土試料の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

1. はじめに

甲府市の桜井畑遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SI2のカマドから得られた炭化材（試料No.1:PLD-49943）、SD4bの壺の中から得られたイネ炭化種子（試料No.19:PLD-49944）、SD14の土層No.3から得られた炭化材（試料No.21:PLD-49945）の合計3点である。いずれも土壌の水洗選別により抽出された試料である。調査所見による遺構の推定時期は、SI2が古墳時代後期、SD4bが古墳時代前期、SD14が中世である。炭化材試料は、いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49943	遺構: SI2 位置: カマド 試料No.1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-49944	遺構: SD4b 位置: 壺の中 試料No.19	種類: 炭化種実 (イネ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-49945	遺構: SD14 層位: 土層No.3 試料No.21	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇

宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年校正には OxCal4.4 (校正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年校正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-49943 試料No.1	-25.94 ± 0.17	1293 ± 20	1295 ± 20	674-691 cal AD (19.44%) 695-703 cal AD (9.54%) 741-754 cal AD (17.42%) 755-773 cal AD (21.88%)	665-708 cal AD (42.44%) 713-717 cal AD (1.24%) 721-774 cal AD (51.77%)
PLD-49944 試料No.19	-26.09 ± 0.16	361 ± 18	360 ± 20	1476-1514 cal AD (37.96%) 1590-1620 cal AD (30.31%)	1459-1524 cal AD (50.69%) 1560-1564 cal AD (1.16%) 1571-1631 cal AD (43.60%)
PLD-49945 試料No.21	-27.88 ± 0.18	2149 ± 20	2150 ± 20	343-321 cal BC (20.40%) 202-154 cal BC (47.87%)	349-308 cal BC (25.65%) 207-99 cal BC (67.98%) 69-58 cal BC (1.82%)

4. 考察

以下、各試料の暦年校正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。

SI2 のカマドの炭化材 (試料 No.1: PLD-49943) は、665-708 cal AD (42.44%)、713-717 cal AD (1.24%)、721-774 cal AD (51.77%) の暦年代範囲を示した。これは 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代に相当する。SI2 の推定時期は古墳時代後期であり、今回の測定結果は推定よりも 70 年以上新しい年代である。

SD4b の壺の中のイネ炭化種子 (試料 No.19: PLD-49944) は、1459-1524 cal AD (50.69%)、1560-1564 cal AD (1.16%)、1571-1631 cal AD (43.60%) の暦年代範囲を示した。これは 15 世紀中頃～17 世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。SD4b の推定時期は古墳時代前期であり、今回の測定結果は推定よりも 1100 年以上新しい年代であった。

SD14 の土層 No.3 の炭化材 (試料 No.21: PLD-49945) は、349-308 cal BC (25.65%)、207-99 cal BC (67.98%)、69-58 cal BC (1.82%) の暦年代範囲を示した。これは紀元前 4 世紀中頃～紀元前 1 世紀中頃で、弥生時代中期中葉～中期後半に相当する。SD14 の推定時期は中世であり、今回の測定結果は推定よりも 1200 年以上古い年代である。

木材試料は、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。SI2 の試料 No.1 と SD14 の試料 No.21 は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。SD4b の試料 No.19 は種実試料で、測定結果は結実年代を示している。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal BP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

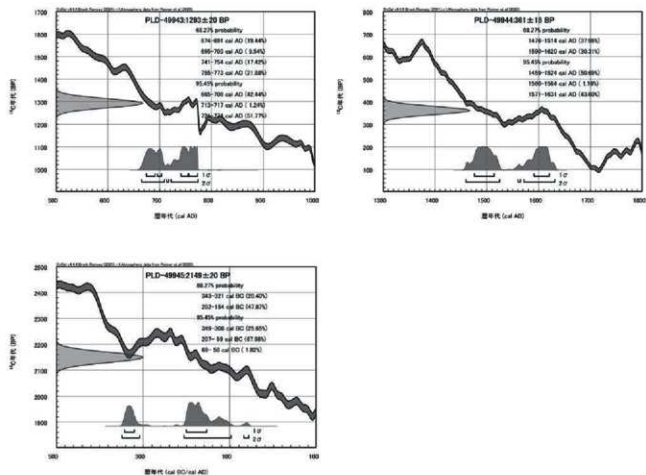


図1 暦年較正結果

第2節 桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）から出土した大型植物遺体

バンダリ スタルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

山梨県甲府市の桜井畑遺跡は、平等川によって形成された沖積地の微高地上に立地する、古墳時代から近世の複合遺跡である。ここでは、古代の竪穴住居のカマドや土壇墓、溝状遺構の堆積物などから得られた大型植物遺体の同定結果を報告し、当時の利用植物の一端について検討する。

2. 試料と方法

試料は、水洗選別後に抽出済みの試料が4試料と、堆積物試料が4試料の、計8試料で、奈良時代の竪穴住居 SI2 のカマドから1試料と、平安時代の竪穴住居のカマド SI4 と SI6、竪穴内土坑 SK13 (SI5 内)、竪穴内ビット SP18 (SI5 内)、土坑墓 SK7 から各1試料、古墳時代前期の溝状遺構 SD4b から1試料、時期不明の土坑 SK8 から1試料である。試料は、昭和測量株式会社によって採取された。

抽出済み試料の4試料である、竪穴住居 SI6 カマドと SK13 (SI5 内)、竪穴内ビット SP18 (SI5 内)、土坑 SK8 の採取から水洗、種実の抽出までの作業は、昭和測量株式会社によって行われた。水洗浄と篩のサイズは不明である。堆積物試料の4試料である、竪穴住居 SI2 カマドと SI4 カマド、土坑墓 SK7、溝状遺構 SD4b については、パレオ・ラボにて、300cc～600cc の土壌量を最小 0.5mm 目の篩を用いて水洗した。

大型植物遺体の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行い、写真撮影は実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残っている場合に1個体とした。小穂軸以外の籾殻、動物遺体の破片は、おおよその数を記号 (+) で示した。同定された試料は、甲府市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、草本植物ではヘラオモダカ果実とメヒシバ属有ふ果、イネ籾殻・炭化籾殻・炭化種子（穎果）、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化種子（穎果）、コムギ炭化種子（穎果）、ササゲ属アズキ垂属炭化種子、マメ科炭化種子、カタバミ属種子、ウシハコベ種子、アカザ属炭化種子、スベリヒユ属種子、メハジキ属果実の13分類群、シダ植物ではスギナ近似種無性芽のみ1分類群の、計14分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実を不明炭化種実、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能一群を同定不能炭化種実とした（表1）。

以下に、出土した大型植物遺体について、時期ごとに、遺構別に記載する。

[古墳時代前期]

溝状遺構 SD4b：メヒシバ属が少量、ヘラオモダカとイネ、エノコログサ属、オオムギ、カタバミ属、ウシハコベ、スベリヒユ属、メハジキ属がわずかに得られた。

[奈良時代]

竪穴住居 SI2 カマド：アカザ属がわずかに得られた。

[平安時代]

竪穴住居 SI4 カマド：オオムギとマメ科、アカザ属がわずかに得られた。

竪穴住居 SI6 カマド：スギナ近似種がわずかに得られた。

竪穴内土坑 SK13 (SI5 内)：オオムギとコムギ、ササゲ属アズキ垂属がわずかに得られた。

竪穴内ビット SP18 (SI5 内)：同定可能な炭化種実は得られなかった。

土坑墓 SK7：イネがわずかに得られた。

[時期不明]

上坑 SK8：イネとオオムギ、コムギがわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) メヒシバ属 *Digitaria* spp. 有ふ果 イネ科

黄褐色で、側面観は披針形、断面は狭卵形。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。長さ 2.7mm、幅 0.8mm。

(2) イネ *Oryza sativa* L. 粳穀・炭化粳穀・炭化種子(穎果) イネ科

粳穀は黄褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 2.2mm、残存幅 0.5mm。炭化種子(穎果)は、上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 4.9mm、幅 2.9mm。

(3) エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ 2.3mm、幅 1.2mm。

(4) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は長楕円形、側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。長さ 4.2mm、幅 2.5mm、残存厚 2.0mm。

(5) コムギ *Triticum aestivum* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観と側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸みを帯びている。長さ 3.5mm、幅 2.5mm、厚さ 2.3mm。

(6) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Ceratotropis* 炭化種子 マメ科

完形ならば上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から 2/3 ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。残存長 4.4mm、幅 3.5mm。

(7) マメ科 *Fabaceae* spp. 炭化種子 マメ科

状態は悪いが、完形ならば上面観は楕円形、側面観は腎形。臍部分が最もくぼむが、残存していない。表面は平滑。長さ 6.2mm、幅 3.7mm、厚さ 2.8mm。

(8) アカザ属 *Chenopodium* sp. 炭化種子 ヒユ科

上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突出し、中心部方向に向かって浅い溝がある。長さ 0.9mm、幅 1.0mm。

(9) 不明 *Unknown* 炭化種実

破片のため、全体形は不明。種皮は光沢があるが、識別可能な構造はなかった。残存長 6.1mm、残存幅 4.7mm。

4. 考察

溝状遺構 SD4b (壺の中の土)からは、栽培植物のイネやオオムギが得られており、壺が埋没する前から壺に入っていた可能性もあるが、壺に入り込んだ堆積物に、何らかの要因で炭化した後のイネやオオムギが含まれていた可能性も考えられる。野生動物のヘラオモダカとメヒシバ属、エノコログサ属、カタバミ属、ウシハコベ、スベリヒユ属、メハジキ属も産出しており、これらの草本類が周辺に生育していたと考えられる。奈良時代の竪穴住居 SI2 のカマドからは、野生植物のアカザ属が得られており、偶発的にカマドに入り、炭化した可能性がある。

平安時代の竪穴住居 SI4 のカマドからは、オオムギとマメ科が得られた。また竪穴内土坑 SK13 (SI5 内)からは、畑作物のオオムギとコムギ、野生植物で食用として利用可能なササゲ属アズキ亜属が得られた。こ

れらは住居内で利用されたオオムギなどの栽培植物の残滓がカマドに入って炭化したり、何らかの理由で炭化した後に土坑内に堆積したと考えられる。SI4のカマドからは野生動物のアカザ属も得られており、雑草がカマドで燃やされ、堆積した可能性もある。

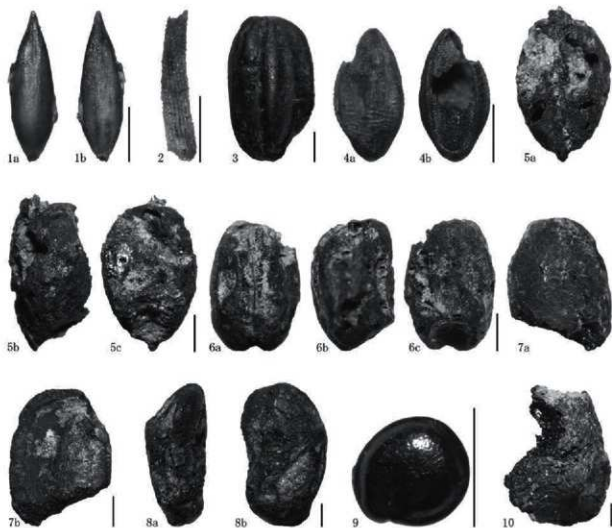
時期不明の土坑SK8からは、栽培植物のイネとオオムギ、コムギが得られており、周辺の居住域で利用されたイネ、オオムギ、コムギが、流れ込んだり廃棄されたりして堆積した可能性がある。

引用文献

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

表1 板井畑遺跡から出土した大型植物遺体 (括弧内は破片数)

遺構	竪穴住居		土壌墓	溝状遺構	竪穴住居	竪穴内 土坑	竪穴内 ピット	土坑
	SI2	SI4	SK7	SD4b	SI6	SK13 (SI5内)	SP18 (SI5内)	SK8
層位・位置	カマド	カマド	第3層	壺の中の土	カマド	焼土	-	最下層
試料No.	1	2	11	19	5	14	25	12
時期	奈良時代	平安時代		古墳時代		平安時代		時期不明
分類群	水洗量 (cc)	300	500	600	350		不明	
ヘラオモダカ	果実				1			
メヒシバ属	有ふ果				5 (27)			
イネ	粉粒			(+)	(+)			
	炭化粉粒							
	炭化種子 (穎果)				1			(1)
エノコログサ属	有ふ果				1			
オオムギ	炭化種子 (穎果)		(1)		1			1
コムギ	炭化種子 (穎果)					1		1
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子						(3)	
マメ科	炭化種子		1 (3)					
カタバミ属	種子				3			
ウシハコベ	種子				1			
アカザ属	炭化種子	1	4 (5)					
スベリヒユ属	種子				1			
メハジキ属	果実				1			
スギナ近似種	無性芽					(1)		



スケール 1-10:1mm

図版1 桜井畑遺跡から出土した大型植物遺体

1. メヒシバ属有ふ果 (SD4b, No.19)、2. イネ初穀 (SD4b, No.19)、3. イネ炭化種子 (SD4b, No.19, PLD-49944)、4. エノコログサ属有ふ果 (SD4b, No.19)、5. オオムギ炭化種子 (SK13, No.14)、6. コムギ炭化種子 (SK13, No.14)、7. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (SK13, No.14)、8. マメ科炭化種子 (SI4カマド, No.2)、9. アカザ属炭化種子 (SI4カマド, No.2)、10. 不明炭化種実 (SI6カマド, No.5)

第6章 総括

桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）の発掘調査では、主に古墳時代前期、奈良時代、平安時代の遺物と遺構を確認した。それぞれの成果をまとめ総括とする。

第1節 桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）の出土遺物（第34図）

図示できた出土遺物を年代別に6時期に整理した。土器の年代観については、古墳時代は甲斐地域の古墳時代について提示した小林健二の編年案（小林2010・2015）、奈良・平安時代は『山梨県史』の編年を参考とした。

第1期

第1期は古墳時代以前である。今回の調査ではこの時期の遺構は検出できなかった。出土遺物の資料数も少なく、調査区全体でも破片資料を数点確認したに過ぎない。1・2は縄文時代中期初頭の五領ヶ台I式土器である。3・4は弥生土器で、縄文を地文として沈線文を施す。弥生時代中期か。いずれもSZ1の周溝の埋土中から出土した資料である。

第2期

第2期は古墳時代前期である。方形周溝墓（SZ1～3）の周溝と竪穴建物（S11）、溝状遺構（SD4b）、不明遺構（SX4）の出土遺物を挙げた。SZ1～3の周溝とS11、SD4bは重複しており、切り合い関係ではSZ1周溝・SZ3周溝・SD4bが古く、SZ2周溝・S11が新しい。第34図で図示した遺物はすべて土器で、高坏、器台、台付甕、壺である。器台は外反口縁の小型器台がある。台付甕は肩部に横ハケは見られない。壺は口縁端部に刺突文を施すものや、肩部に櫛描きの直線文・斜列点文を施すものがある。資料数が少なく、重複による混入も考えられるため各遺構ごとの詳細時期の検討は難しいが、第2期全体としては小林編年で古墳Ⅲ・Ⅳ期（4世紀）に取まる時期に比定できる遺物と考える。

第3期

第3期は奈良時代とした。竪穴建物（S12）の床面出土遺物2点を挙げた。いずれも土器の甕で体部がやや外側に開き、口縁部がゆるく外反する器形である。遺物の時期は古墳時代後期から奈良時代にかけての時期幅で想定していたが、S12のカマドから採取した炭化物を放射性炭素年代測定したところ、7世紀後半から8世紀後半に相当する年代を示した。県史編年では奈良平安I～Ⅲ期に相当する。時期の区分としては奈良時代としておきたい。

第4期

第4期から第6期は平安時代である。第4期としては土坑墓とみられるSK7の一括遺物5点を挙げた。全て土器の環で、土坑の底面で正位に据えられ、原位置を保った状態で出土した遺物である。編年上は奈良・平安時代のそれまでの環と比べて小型化し、直線的な体部を持っている。胎土や成形は粗雑で、歪みも大きい。県史編年では奈良平安Ⅳ期（11世紀前半）に相当する。

第5期

第5期としては竪穴建物S14とS15の出土遺物をそれぞれ4点ずつ挙げた。全て土器で、47・53・54・55は皿、48・49は坏、51は置きカマド、56は柱状高台皿である。坏・皿の小型化が進み、底部が台状に厚くなる。県史編年では奈良平安Ⅴ期（11世紀後半）に相当する。

第6期

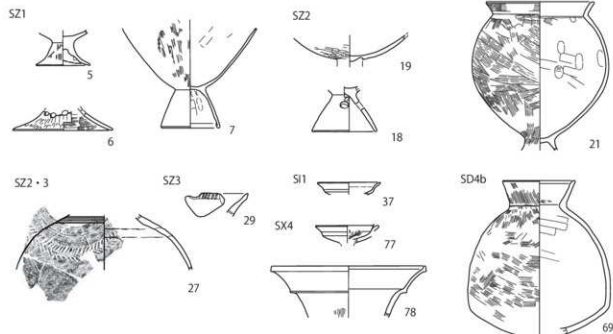
第6期としては竪穴建物S13の出土遺物3点を挙げた。44・45は土器である。44は柱状高台環である。高台は中実で、裾部が「ハ」の字状に開く。45は皿で、底部は厚く口縁が短く立ち上がる。46は白磁の碗で、口縁は玉縁状である。県史編年では奈良平安Ⅹ期（11世紀末～12世紀）に相当する。

第6期以降ではSD14で土器のかわらけと推定した資料があるが、器形復元できず確実な資料ではない。

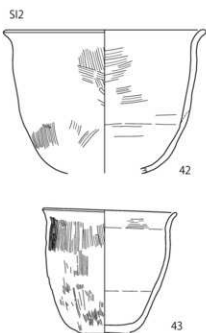
第1期 SZ1



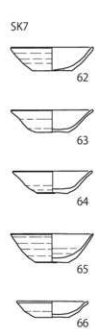
第2期



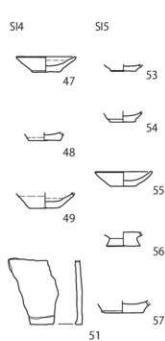
第3期



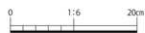
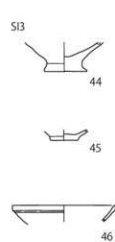
第4期



第5期



第6期



第34図 出土遺物の様相

第2節 桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）の遺構変遷と課題

桜井畑遺跡（川田・和戸サッカー場地点）の発掘調査では、方形周溝墓3基、竪穴建物6軒、土坑20基、ピット39基、溝状遺構21条、不明遺構8基を確認した。時期別に遺構の変遷と課題をまとめる。

古墳時代以前（第1期）

古墳時代以前の遺構は確認できなかった。

古墳時代前期（第2期）

古墳時代前期では、調査区南東部で方形周溝墓S Z 1～3の周溝及び竪穴建物S I 1と溝状遺構S D 4 b、調査区中央部で溝状遺構S D 11・15を確認した。

方形周溝墓S Z 1～3は、墳丘は削平され残っており周溝のみを検出している。いずれの周溝もブリッジ状の陸橋部分などは確認できず全容は不明だが、S Z 1は一辺が16.2mで軸方向はN-37°-W、S Z 3は一辺15.8mで軸方向はN-46°-Wと推定できる。S Z 2は周溝の屈曲部1か所のみを検出であったため規模は不明である。桜井畑遺跡全体で見ると、桜井畑遺跡A・C地区の調査で、3号墓が一辺33.4m、2号墓が28mと大形の周溝墓も確認されているが、S Z 1・3は一辺約16mで、方形周溝墓としては比較的事例の多い規模といえることができる。

竪穴建物S I 1は、S Z 1とS Z 3の周溝をまたぐ位置に検出した。重複関係では周溝より新しい。検出時点では竪穴の平面形を確認できなかったが、掘り下げて硬化面を検出し、さらに壁面の精査で焼土範囲も検出できたため、竪穴建物と推定した。別時期の遺物が出土していないため、古墳時代前期に属する遺構としたが、方形周溝墓との時期差があまりない時点での墓域から居住域への変化をどのように説明できるかは検討課題となる。

溝状遺構S D 4 bは、方形周溝墓S Z 2の周溝に重複し、切り合いでは先行する。遺存状態の良い土師器の壺（遺物№69）が出土した（第4図）。遺構の大部分は調査区外であるが、切り合い関係では古い時期に属する遺構であるため、壺の中に入っていた土壌を試料に分析を行った。その結果、栽培植物のイネやオオムギの炭化種子が得られた。さらにそのイネを用いて放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀中頃～17世紀前半の測定結果であった。この結果は調査所見と大きく開きがあるが、ここでは遺物の推定年代を採り、古墳時代前期に帰属する遺構としておきたい。溝状遺構ではS D 11・15もこの時期に属する遺構と考える。調査区の形状により分断されているが、位置関係や方向から同じ遺構とみられる。わずかではあるが古墳時代前期の遺物も出土している。また、軸方向からも方形周溝墓などの方向性と大きく矛盾しない。

古墳時代前期以降は奈良時代に至る8世紀までの間の約400年間に渡って遺構が確認できない。

奈良時代（第3期）

奈良時代では、調査区南東部で竪穴建物S I 2を確認した。S I 2は平面形状が横長の長方形の竪穴建物で、北壁に設置されたカマドの煙道が竪穴の外へ長く突出するのが特徴的である。同様の構造の竪穴建物は葦崎市宮ノ前遺跡第51号住居址などで報告されており、宮ノ前1期（8世紀前半）以前のもので推定されている。S I 2は出土遺物から古墳時代後期から奈良時代の時期幅で帰属時期を考えていたが、放射性炭素年代測定の結果も踏まえて、奈良時代とした。建物の主軸方向はN-12°-Wである。今回の調査区内ではS I 2が出現した後、11世紀までの約300年間の間、遺構や遺物を確認できないが、試掘調査ではT 2を中心として、その間の遺構や遺物が確認されている。

平安時代（第4期）

平安時代に入ると第4期で、調査区中央部で土坑墓とみられるS K 7を確認した。土坑は長楕円形を呈し、長径2.14m、短径1.03mを測る。土坑底面で5点の土師器の環が出土しており、それらの一括遺物から11世紀前半を想定している。

平安時代（第5期）

第5期では調査区中央部で2軒の竪穴建物S I 4とS I 5を確認した。約10mの間隔で並んでおり、同

時期に建っていた可能性もある。どちらも南東隅部にカマドを持つ。S I 4の主軸方向はN-9°-Eである。古墳時代の方形周溝墓とは明らかに主軸方向が変わっており、S I 5や前期のS K 7、次期のS I 3についても大きな変化はない。少なくともこの時期には現在の区画の軸方向へとつながる土地利用が開始されていたとみられる。11世紀後半を想定している。

平安時代(第6期)

第6期では調査区中央部で竪穴建物S I 3を確認した。南東隅部にカマドを持ち、主軸方向はほぼ南北軸に重なる。11世紀末から12世紀を想定している。

時期不明の遺構

第6期を最後に時期を確認できる遺構はなくなり、出土遺物もほとんどない。その中で時期不明の遺構ではあるが溝状遺構S D 14とS D 19・20について触れておく。

S D 14は調査区北西部に位置する。検出部分の長さ5.9m、幅3.5m、深さ1.1mを測り、溝の両側は調査区外へ延びる。調査区内ではやや湾曲した形状で検出されたため、環状の遺構を想定して、想定ライン上でトレンチ調査を行ったが、少なくとも円形に巡る遺構ではないことを確認した。掘方の形状には人為的に掘削された痕跡があり、下層の堆積には流水の痕跡が認められる。その規模に比して出土遺物は極端に少なく、土器の破片資料が8点で、いずれも摩滅が激しい。図化した2点のうち、1点は弥生中期とみられる。もう1点は土器のかわらけか。図化できなかった小片には縄文土器も含まれており、時期の決め手を欠いたため、土壌サンプルから採取した試料を用いて年代測定を行った。測定結果は弥生時代中期を示したが、出土遺物が少なく年代測定の推定年代と整合性がある遺物は1点のみである。遺構の時期は判断し難く、性格についても今後に大きな課題が残った。なお、調査区内では、上述の1点に加えてS Z 1周溝からも弥生時代中期とみられる土器を2点確認している。

S D 19・20は調査区北西部に位置し、南北方向に並走する溝状遺構である。溝の芯々距離は約3mで、土層断面の観察で路面とみられる堆積を複数面検出した。少なくとも近代以前に遡ることができ、条里にかかわる旧道路の側溝と考えた。開削時期は不明だが、平安時代の土師器の環が1点出土している。S D 19・20の軸方向は現在の区画に沿っている。前述したように平安時代の11世紀には現在の区画の軸方向に沿った土地利用が開始されており、条里の開始時期も含め今後この一帯の条里区画のさらなる検討が必要である。

引用・参考文献

- 甲府市市史編さん委員会 1989『甲府市史』史料編第一巻 原始・古代・中世
山梨県教育委員会 1989『桜井畑遺跡B地区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第50集
山梨県教育委員会 1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第54集
葦崎市遺跡調査会 1992『宮ノ前遺跡—葦崎市立葦崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書—』
山梨県 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2
山梨県教育委員会 2001『道々芽木遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第188集
山梨県教育委員会 2002『久保田・道々芽木遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第197集
大坪遺跡発掘調査会 2002『大坪遺跡—平成12年度調査地点の報告—』
山梨県教育委員会 2003『道々芽木遺跡(第3次)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第206集
甲府市教育委員会・川田遺跡群発掘調査団 2008『山梨学院川田運動場遺跡群(桜井畑遺跡・亀田遺跡・川田久保田遺跡)』
甲府市文化財調査報告 37
小林 健二 2010『古墳時代における甲斐の地域社会』『山梨県考古学協会誌』第19号
小林 健二 2015『甲斐の古墳時代と土器』『山梨県考古学協会誌』第23号
甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2017『大坪遺跡(甲府市横根町629-4他地点)』甲府市文化財調査報告 90



調査区南東部 西から



調査区中央部 南西から



調査区中央部・北西部 南西から



調査区北西部 南から



SZ1 周溝検出状況 西から



SZ1 周溝東壁セクション 西から



SZ1 周溝西壁セクション 東から



SZ1 周溝中央セクション 西から



SZ1 遺物出土状況 西から



SZ1 周溝遺物出土状況 北から



SZ1 周溝完掘 西から

図版 4



S22 周溝検出状況 西から



S23 周溝・S22 周溝・SD4b 東壁セクション 南西から



S22 周溝・SD4b 東壁セクション 西から



S22 遺物出土状況 東から



S22 遺物出土状況 西から



S22 周溝完掘 北東から



S22 周溝完掘 北西から



SD4b 遺物出土状況 西から



SZ3 周溝検出状況 南西から



SZ3 周溝東壁セクション(北側) 西から



SZ3 周溝・SZ2 周溝東壁セクション(南側) 西から



SZ3 周溝西壁セクション(北側) 東から



SZ3 周溝西壁セクション(南側) 東から



SZ3 周溝・SZ2 周溝セクション 南西から



SZ3 周溝遺物出土状況 北から



SZ3 周溝完掘 南西から



S11 遺構検出状況 南から



S11 床面遺物出土状況 東から



S11 硬化面検出状況 東から



S11 硬化面検出状況 北西から



S12 検出状況 南から



S12 セクション 南東から



S12 セクション 東から



S12 セクション 南から



SI2 床面遺物出土状況 南から



SI2 床面遺物出土状況 東から



SI2 床面遺物出土状況 (遺物No42) 南西から



SI2 床面遺物出土状況 (No43) 東から



SI2 カマド検出状況 南から



SI2 カマド煙道セクション 東から



SI2 カマド煙道セクション 南から



SI2 カマド煙道完掘状況 南から



S13 検出状況 東から



S13 セクション 南から



SK8 カマド検出状況 北西から



S13 床面検出状況 西から



SK8 上面集石検出状況・平石検出状況 (S13内) 東から



SK8(S13内) セクション 北から



SP7(S13内) 完掘 東から



S13 完掘 西から



S14 セクション 西から



S14 床面遺物出土状況 北から



S14 カマド検出状況 北西から



S14 カマド 北西から



S14 カマド掘方 北西から



S14 床面完掘状況 西から



S14 掘方セクション 南西から



S14 掘方 西から



SIS 検出状況 西から



SIS セクション 南西から



SIS・SD9北壁セクション 南から



SIS 床面遺物出土状況 北から



SIS 床面遺物出土状況 北から



SIS カマド検出状況 西から



SIS カマド完掘 西から



SIS 完掘 西から



SI6 検出状況 東から



SI6 カマド検出状況 北から



SK1 遺物出土状況 西から



SK5 発掘 西から



SK7 遺物出土状況 北東から



SK7 遺物出土状況 東から



SK7 遺物出土状況 東から



SK7 発掘 東から



SK11(S15内)セクション 北から



SK11(S15内)完掘状況 北から



SK14セクション 東から



SK16(S14内)セクション 北から



SP21セクション 東から



SP36セクション 西から



SD1検出状況 西から



SD9完掘 北から



SD14 完掘 南西から



SD14 東壁セクション 西から



SD14 西壁セクション 東から



SD14 遺物出土状況 東から



SD14 遺物出土状況 東から



SD20・19完掘 南から



SD20・19完掘 南から



SD20・19北壁セクション 南から



SX4完掘 北東から



SX6完掘 南から

SZ1



SZ2



18



19



20



21



22



23

SZ2·3



24



25



26



27



28

SZ3



29



30



31



32



33



34



35



36

SI1



37



38



39



40



41

SI2



42



43

SI3



44



45



46

SI4



47



48



49 ※SK16(SI4 内)



50 ※SK16(SI4 内)



51



52 ※SK16(SI4 内)

S15



53



54



55



56



57



58 ※SK13(S15内)

S16



59

SK1



60



61

SK7



62



65



63



66



64

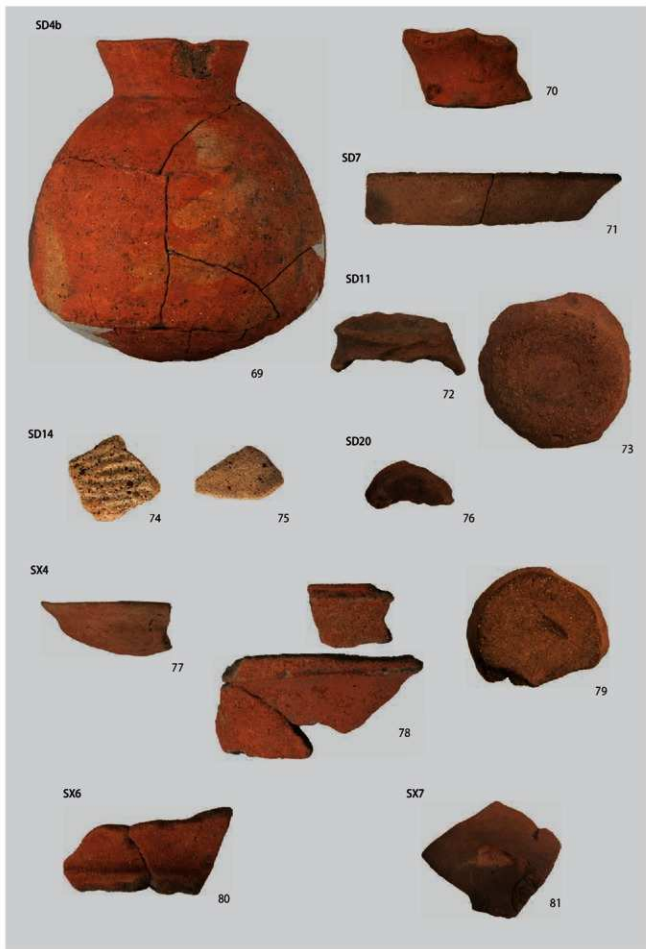


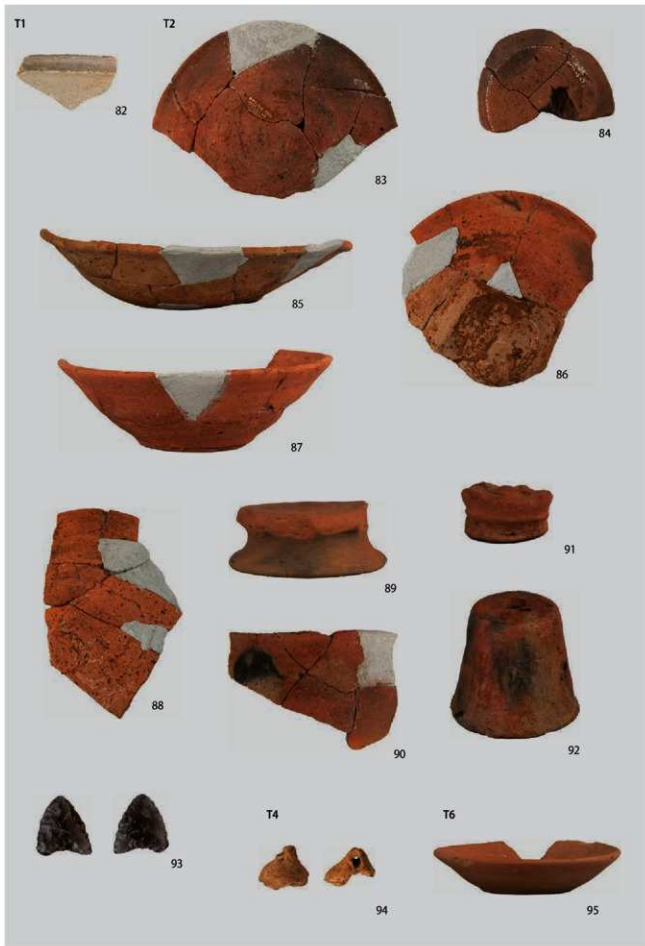
67

SP21



68





報告書抄録

ふりがな	な	さくらいばたいせき (かわだ・わどさっかーじょうちてん)
書名	桜井畑遺跡 (川田・和戸サッカー場地点)	
副書名	サッカー場建設に伴う発掘調査報告書	
巻次		
シリーズ名	甲府市文化財調査報告	
シリーズ番号	135	
編者	者	泉 英樹・平塚洋一・伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadize・黒沼保子・バンダリスダルシヤン
編集機関	昭和測量株式会社	
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448	
発行年月日	2023(令和5)年9月30日	

ふりがな	ふりがな	コ ー ド	世 界 測 地 系	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
所取遺跡名	所在地	市町村	緯 緯 東 経			
さくらいばたいせき	やまなしけんこうふし わどまち1-1ほか					
桜井畑遺跡	山梨県甲府市 和戸町1-1他	19201 171	35° 39' 5" 138° 37' 28"	20220819 ～20221031	1,586㎡	サッカー場建設

所取遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
桜井畑遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	方形周溝墓・竪穴建物・土坑墓・土坑・溝状遺構など	縄文土器・弥生土器・土師器・灰輪陶器・白磁・石器・石製品・金属製品	古墳前期の方形周溝墓3基の周溝と竪穴建物1軒、奈良平安の竪穴建物5軒と土坑墓1基を検出した。条里にかかわる可能性がある道路状遺構の側溝を検出した。

要 約	<p>古墳時代前期では、重複する3基の方形周溝墓の周溝と竪穴建物1軒を検出した。それぞれの方形周溝墓の周溝は調査区外に延びており全容は不明だが、方形周溝墓SZ1は一辺が16.2m、SZ3は一辺が15.8mと推定できる。SZ1の周溝に重複して竪穴建物SI1を検出しており、切り合いではSI1が新しい。</p> <p>奈良・平安時代では、竪穴建物5軒と土坑墓1基を検出した。竪穴建物SI2の掘方は長方形で、カマドの煙道は長く突出する。出土遺物より奈良時代の竪穴建物である。他の4軒の竪穴建物はいずれも平安時代で、11世紀から12世紀にかけてのものである。土坑墓SK7は、長楕円形を呈し、長径2.14m、短径1.03mを測る。土坑の底面で土師器の環5点が出土しており、さらにその中心の位置で刀子とみられる金属製品が出土した。</p> <p>調査区の北西部では並走する溝状遺構SD19・20を検出した。溝の芯々距離は約3mで、条里にかかわる道路状遺構の側溝の可能性が高い。近代以前に遡ることができ、平安時代の遺物も1点出土している。</p>
-----	--

甲府市文化財調査報告135

桜井畑遺跡

川田・和戸サッカー場地点
—サッカー場建設に伴う発掘調査報告書—

2023(令和5)年9月30日 発行

編 集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発 行 学校法人C2C Global Education Japan・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印 刷 株式会社内田印刷所